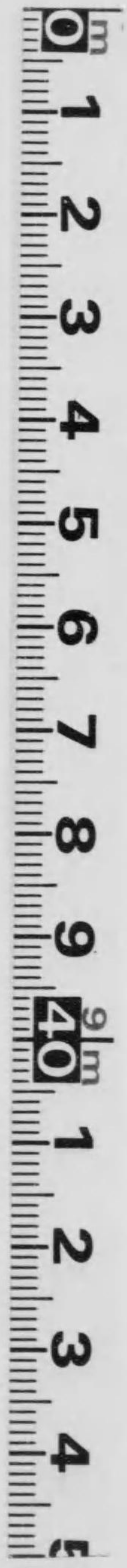


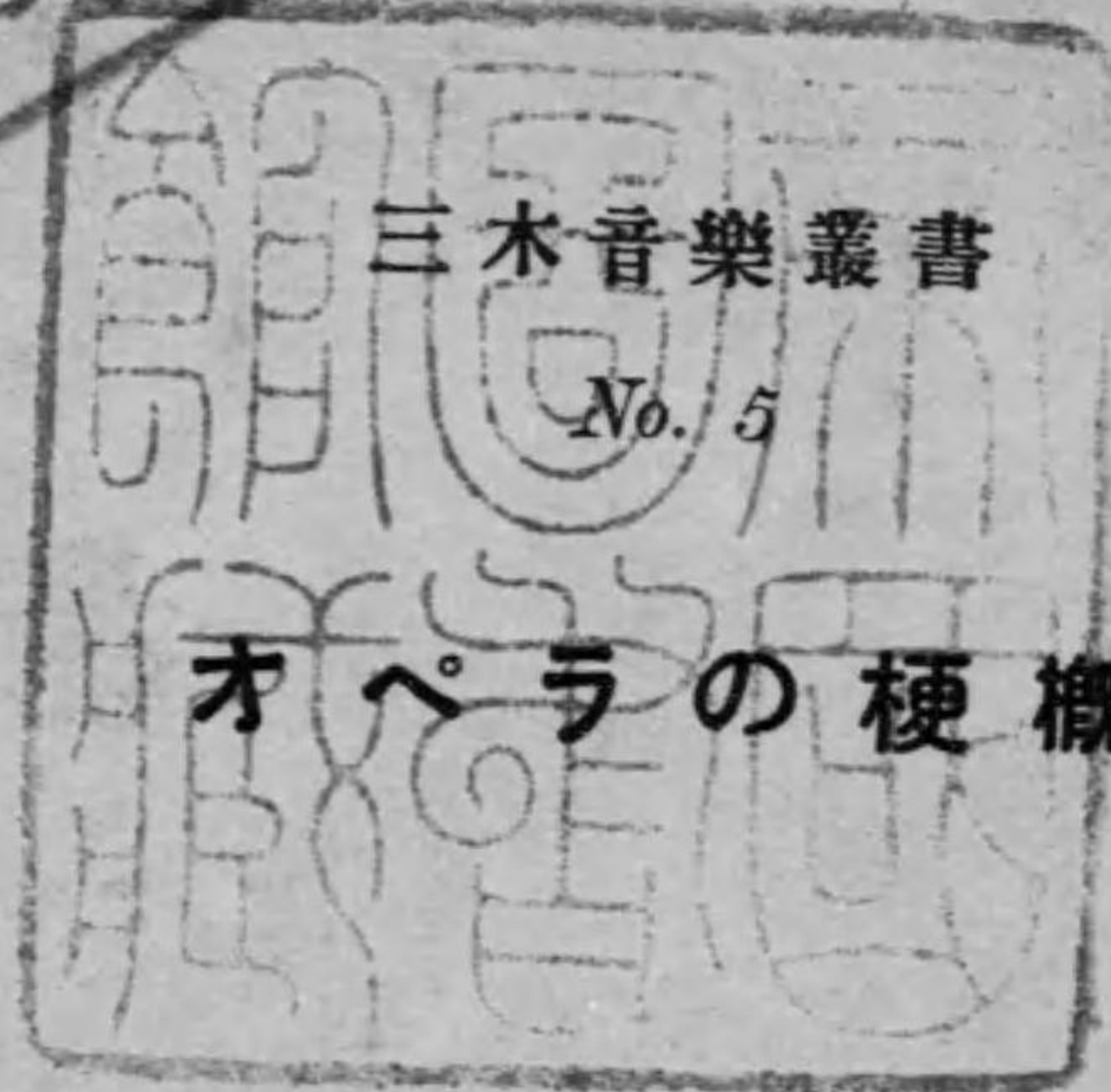
766
0.65



始



HA 1089
こ



766
0.65

20



大阪

三木露成館藏版
15. 2. 23
内交

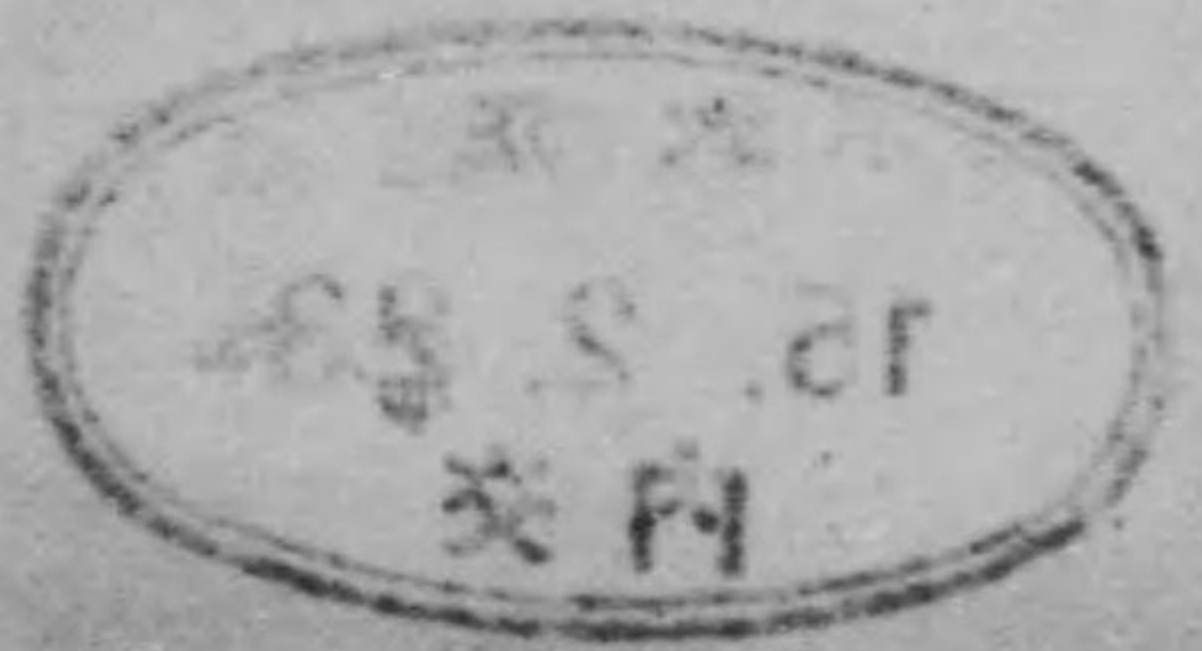
576-229

三木音楽叢書

第五編 オペラの梗概

目次

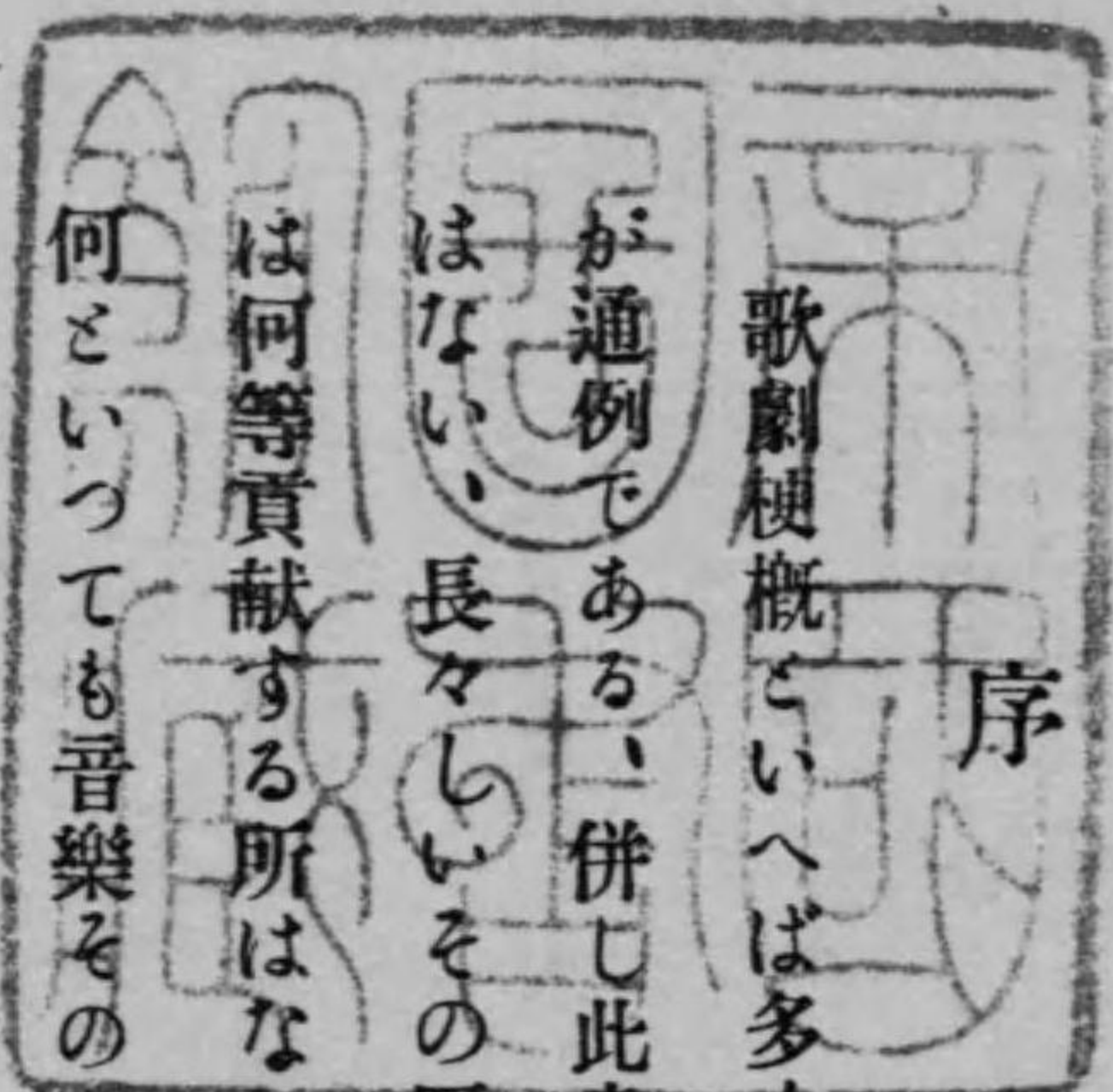
序	説	
一、	オルフォイス	一五
二、	ドン・ジオバンニ	二三
三、	フィデリオ	三三
四、	自由射手	四一
五、	ルチアデアラムメルモール	五一
六、	ファウスト	五七
七、	カルメン	六七



八、リゴレット	七七
九、イル・トゥラヴァートル	九一
一〇、トラヴィアタ	九九
一一、アイーダ	一〇九
一二、さまよへる和蘭人	一二一
一三、タンホイザー	一三一
一四、ローエングリン	一四一
一五、トリスタンとイゾルデ	一五一
一六、ニュールンベルグの名歌手	一五九
一七、ラインの黄金	一七一
一八、ヴルキューレ (戦姫)	一七九
一九、ジークフリード	一八七

二〇、神々の黄昏	一九七
二一、バルシファル	二〇七
二二、カヴァレリア・ルスティカナ	二一七
二三、道化師	二二五
二四、胡蝶夫人	二三三
二五、ウイリアム・テル	二四一
二六、ミニヨン	二五一
二七、セヴィラの理髪師	二五九
二八、フィガロの結婚	二六九

オペラの梗概



序説

歌劇梗概といへば多くの書物は先づ歴史から説き出すのが通例である、併し此書では歌劇の歴史などを云ふべき考はない、長々しいその歴史を知つた處で歌劇を聞くためには何等貢献する所はなからうと思ふ、歌劇を聞く爲には、何といつても音楽そのものゝ構造を知らねばならぬ、そうして一つ一つの筋書を見て置くことが必要である。

構造といつても全体の音楽的組織即ち組合せである、云

ふまでもなく、一つ一つ皆形は違つて居るが、場所々々に
顯はれて来る音樂的形式はグルツクがオルフォイスを作つ
たときから定まつたやうなものである。

今オルフォイスの組織を見れば、

Overture (大序曲)

第一幕

- 一、Chor. 合唱 (嗚呼此の閑かな森に於て……)
- 二、Pantomime. 無言劇
- 三、A. Arie 咏嘆調 (私の愛の對象物……)

- 三B、Recitativ 宣叙調 (オイリディツセよ……)
- 三C、Arie 咏嘆調 (困難と驚きに満ちて……)
- 四、Arie 同 (若しもリラの甘い和絃が……)
- 五、Arie 同 (沈黙に陥らされて……)
- 六、Arie 同 (愛よ我胸に歸れ……)

第二幕

- 七、Furientanz (復讐の女神の舞踏)
- 八、Chor 合唱 (何ぞ大膽不敵な奴……)
- 九、Furientanz (復讐の女神の舞踏)
- 一〇、Chor 合唱 (何ぞ大膽不敵な奴……)

- 一一、Arie und chor咏嘆調と合唱 (名に觸れしめよ！)
- 一二、Chor 合唱 (汝さ此處に持ち運んで来たもの……)
- 一三、Arie咏嘆調 (あゝ私を呑んでしまふ焰……)
- 一四、Chor 合唱 (何と云ふ力強き和絃によつて……)
- 一五、Arie咏嘆調 (私を抱きしめる愛情……)
- 一六、Chor 合唱 (何と云ふ優さしい歌だ……)
- 一七、Furientanz (復讐の女神の舞踏)
- 一八、Ballet 舞踊
- 一九、Ballet 舞踊
- 二〇、Ballet 舞踊

- 二一、Arie und chor咏嘆調と合唱 (此美しい避難所……)
- 二二、Arie咏嘆調 (何と美しい空だらう……)
- 二三、Chor 合唱 (此の平和なる住居に來れ……)
- 二四、Ballet 舞踊

第三幕

- 二五、Duett 二重唱 (來れ！お前を熱愛する
夫について來れ……)
- 二六、Arie咏嘆調 (敵の運……)
- 二七、Arie咏嘆調 (私は私のオイリディッセを失つた……)
- 二八、Chor 合唱 (愛の勝利)
- 二九、Ballet 舞踊

- 三〇、Gavotte 舞踏
- 三一、Ballet 舞踊
- 三二、Menuett 舞踏
- 三三、Terzett 三重唱 (おかしな愛……)
- 三四、Ballet 舞踊
- 三五、Ballet 舞踊
- 三六、Chaconne 舞踏

今又喜歌劇のフィガロの結婚につきて其題目と役割とを示して見れば

Overture (大序曲)

第一幕

- | | |
|--------------|----------------|
| Introduction | 序曲 |
| 1. Duett | {スザンナ
フィガロ |
| 2. Duett | {スザンナ
フィガロ |
| 3. Cavatine | フィガロ |
| 4. Arie | バルトロ |
| 5. Duett | {マルセリナ
スザンナ |
| 6. Arie | ケルボニ |

- 7. Terzett. {グラフ、バシリオ、スザンナ
- 8. Chor. 合唱
- 9. Arie. フィガロ

第二幕

- 10. Cavatine グレフィン
- 11. Canzone ケルビニ
- 12. Arie スザンナ
- 13. Terzett {グラフ、グレフィン、スザンナ
- 14. Duett {スザンナ、ケルビニ
- 15. Finale {グラフ、グレフィン、スザンナ、バルトロ、アントニオ、バシリオ

第三幕

- 16. Duett {グラフ、スザンナ
- 17. Recitativ und Arie グラフ
- 18. Sextett. {マルセリナ、フィガロ、バルトロ、グラフ、クルチオ、スザンナ
- 19. Recitativ und Arie グレフィン
- 20. Duett {スザンナ、グレフィン
- 21. Chor 合唱
- 22. Marsch. {フィガロ、スザンナ、グラフ
- 23. Chor. 合唱

第四幕

24. Cavatine ベルブヘン
25. Arie アルセリナ
26. Arie バシリオ
27. Recitativ und Arie ファイガロ
28. Recitativ und Arie スザンナ
29. Finale 〔ケルピン、グレフィン、スザンナ、グラフ
ファイガロ、マルセリナ、バルトロ、バシリオ等〕
結 尾
30. Arie グレフィン

以上は所謂歌劇の一斑で、ヴァークナーは之を採用せず
樂劇と名けて、すべて形式なきものとした。

Overture とは大序曲といつて開幕以前の音楽で劇中の主
要なる旋律が織り込んであつて、之によつて全曲の氣分を
髣髴せしめるもので、初期のグルックよりウエーベル頃ま
では随分大袈裟なものであつたが、ヴァークナーが出で歌
劇の形式を採用しなくなつてからは前奏曲 Vorspiel と云ふ
小さいものを用ふるやうになり、近代では漸次開幕曲は小
さくなる傾向がある。

Arie は咏嘆調といつて、劇の一人が其時々起る事件に
對して咏嘆的の歌謠をなすのである、形式は歌謠形式であ
る、ヴァークナーのものにも獨唱はあるがアリーの名をつ

けてゐない。

Recitativ は宣叙調といつて、多くは咏嘆調の前にあるもので、頗る自由な体を持つた獨白である、拍子等も自由で伴奏はアクセントに當る所に和絃が入る位のものである。

Duett は二重唱で二人の獨唱が互に對唱し、合唱し、か
らみあうて綿々たる情緒を表はすところである。

Terzett は三重唱である。

Cavatine は獨唱の一種で矢張り歌謠形式であるが反覆のなきものである。

Chor は合唱で多くの男女聲によつて合唱せられるもの

で、最も多くあるものは四部合唱である、其外五部六部等もある、其男女聲を分類すれば

高音部	ソプラノ	女聲
次高音部	メゾ・ソプラノ	
中音部	コントラルト	
次中音部	テノール	
上低音部	バリトン	男聲
低音部	バス	

となる、なほ獨唱の聲としては高音部にはコロラトゥル、高音部及び次中音部にはリリコ、レジエロ、ドラマチコ等

の名稱がある。

これは此の二聲部は大切な部で種々の技巧を要するからである、コロラトゥルは裝飾的といふことで、ソプラノ技巧の多い部分を唱ふに適する聲を有するもので、リリコは抒情的といふことで咏嘆的な處に適する人の聲で、レジエロは輕妙で、ドラマチコは劇的で劇の役をよく現はすに適する聲で、各其得意とする處を定めて居るのである。

Intermezzo は間奏で幕と幕との間に奏されて其經過を示すのである。

一、オルフォイス (四幕)

クリストフ・グルツク作曲

歌劇オルフォイスは一七六二年にグルツクがカルツァビ
ーシの臺詞によつて作つたもので、其役割は次の如くであ
る。

登場人物

オルフォイス……………コントラルト
オイリディツェ……………ソプラノ
愛の神……………ソプラノ

此物語は古代希臘の神話に含まれて居るもので、オルフ
オイスの父は日の神アポロンと云ふものである、又アエゲ
ルども云ふ、母はミューズ(詩音樂の神)と呼ぶ、オルフォ
イスは父アポロンから一個のリラといふ樂器を貰つた、其
音色の微妙なことは一度之を聞くものをして恍惚たらしめ
て、決して一生忘れることが出來ないと云ふことである。

此のオルフォイスに一人の愛する小女があつた、その名
をオイリディツエといふ、彼れ等の願はかなへられて目出

度く結婚した、かくてこの幸福なる二人は楽しく日を送つ
て居たが、ある時オイリディツエが女神である友人と野原
を散歩して居る時に一人の牧人がオイリディツエの美しさ
に心迷ひ之を捕へようとして近づいて來た、オイリディツ
エは辛うじて其手を逃れることが出來たが、其時不幸にも
草叢の中に居た毒蛇に足を咬まれて遂に死んでしまつた。
グルツクのこの歌劇は此れから後の事件を取扱つたもの
で、幕が開くと(第一幕)洞窟がある、其處には死んだオ
イリディツエの墓があり、愛妻を失つたオルフォイスが悲
しげに立つて居る。

村の若者や娘達は悲しい歌を合唱してオイリディツエの墓に花を撒く。

オルフォイスは晝も夜も此處に来て妻の復歸りこんことを祈るのである。併し願は却々届かない、今も亦爰へ来てオイリディツエの名を呼んでゐる、羊飼の若者や娘達が来て、去つた魂の復歸つて来るやうに歌ふ、彼等は墓に花を供へては去る。

オルフォイスは獨り墓に取り縋りながら嘆いて居る、彼は幽界の魔神を呪ひ、死神を恨む、この時愛の神なるアモールが現はれて来てオルフォイスの優しい愛情を賞讃して

オルフォイスに幽界に行つてオイリディツエを求めて来るやうにすゝめる、そうしてお前のリラの妙なる調べが死神の心を静めたならば、死神は妻をかへして呉れるであらうと云ふ、併し彼が再び此世に歸り終るまでは決して願みて妻の顔を見てはならない、若し此誠めに背いたならば、再び死の神の傍へ愛する妻は引きもどされねばならぬと云ふオルフォイスは大に喜ぶ。

第二幕は幽界の場面である、一面に暗黒なる中に鬼火が見へる、而して色んな魔靈が暗中に動いて居る、悪靈等はリラを弾きながら来るオルフォイスを認めて、三つ首の猛

犬セルベルスに命じて、此幽界を侵して来る俗界の人間を喰ひ殺してしまへと云ふ。

オルフォイスはリラに合わせて其の悲しみを訴へるが、魔鬼共は更に耳を傾けない、けれどもオルフォイスの熱烈な音楽は遂に彼等の心を和らげた、そうして地獄の門を静かに開けて呉れた、こゝにオルフォイスは冥府に入ることが出来た、次は第三幕である。

天上界のシーンである、前の幕とは違つて此處では總てが幸福に充ちて居る、オルフォイスは吾妻を探して歩き、遂に彼女を發見して伴れてかへる。

第四幕は暗い森の中である、オルフォイスは天上界から此處まで妻を連れて來たのである、彼は神の誠を破らないと一心に心掛けて居る、オイリディツエは不思議に思つて何故にそのやうに顔をかくして居るかと問ふ、オルフォイスは理由を話す但她は容易に信じて呉れない、自分の顔の醜くなつたためにそのやうに冷淡になつたのかと考へ、彼れに愛の變らぬ證據に唯一目自分を見よと云ふ、けれどもオルフォイスはふりかへつて見ない、彼女は嘆いて又極樂に歸りたいと云ふ、そうして長い二重唱の間二人が各々煩悶を抱いて嘆くが、オイリディツエの嘆が餘りに激しい

ので、オルフォイスは何もかも打ち忘れて夢中になつてオイリドイツエをふりかへつて見るが、其瞬間、萬事休す、オイリドイツエは永遠に逝つた、オルフォイスの悲しみは此上もない、そうして自分も其跡を慕うて幽界に行かうとする其時に愛の神アモールが現れ、彼を止めて其持てる杖でオイリドイツエに觸れて彼女を甦らせる、そうして三人は愛の讃歌を歌ふ、アモールは再び此の二人の手を握らしめるかくして此の歌劇は終りを告げる。

二、ドン・ジオバンニ（喜劇二幕）

モーツァルト作曲

登場人物

ドン・ジオバンニ（放蕩なる若貴族）……………バリトン
 ドン・オッタビオ（ドンナ・アンナの許婚）……………テノール
 レボレロ（ジオバンニの召使）……………バス
 ドン・ベドル（太守）……………バス
 ドンナ・アンナ（其の娘）……………ソプラノ
 マセット（百姓）……………バス
 ツェルリーナ（マセットの許婚）……………ソプラノ
 ドン・エルヴィラ……………ソプラノ

其他、百姓、音楽家、悪魔踊子等

時 代……………第十七世紀
場 所……………セザイラ

此のオペラはモーツァルトのオペラ中で最も美しいものである、唯氏の一傑作たるに止まらず、世界のオペラの中でも一流に属するものと見做されて居る、その臺詞は彼の友人ダ・ボンテによつたもので、其文學的價值も他のオペラに比して秀で、居る、この主人公のドン・ジョバンニは若い貴族で懷疑の精神と放肆の心に驅られて甚だしく放縱な生活をして、其手下のレポレロと共に盛に女を陥れた

人間である。

第一幕は太守の庭で、夜である、其處にはジョバンニの召使なるレポレロがドン・ジョバンニの仕事をして來るのを待つて居る、ジョバンニは今晚も此太守の家を襲うて其娘ドンナ・アンナに近づきに出かけたのである、折しもジョバンニはアンナに追はれて出て來る、アンナは頻りに援を呼んで居る、ジョバンニは彼女を脅かして黙らせようとして居るが、彼女の叫聲を聞きつけてその父ドン・ペドルは出て來てジョバンニの行動を痛く怒り娘を助けんとして拔劍して迫る、ジョバンニも己むを得ず、防禦するが不幸

にも遂にベドルを殺して仕舞ふ。

ジオバンニはレボレロと共にうまく逃げうせた、場面が一轉すると、ジオバンニはレボレロと道を歩いて居る、向うから女が来る、ジオバンニは自分が捨てた女であることを知り、驚いてレボレロを残したまゝ逃げ去る、レボレロは彼女に主人が各國に於て征服した女の表を掲げて女を怒らす、彼女の名はエルヴィラである、エルヴィラは必ず復讐してやらうと決心する。

ジオバンニは今度はツエルリーナを手に入れようとする此の女は百姓の娘で、今夜は其の愛人なるマゼットとの結

婚式があるのである。

其處へ先きのエルヴィラが現はれてジオバンニの目的を邪魔する、そうしてアンナに彼が父の下手人であると告げる、ジオバンニは之を知つて、この女は狂者であると言つて女を連れ去る、併しアンナもオッタヴィオもジオバンニに對して疑を抱くやうになる。

場面が變つてジオバンニの庭園である、これはジオバンニがツエルリーナ等の婚禮の祝のために人々を招待したのである、マゼットやツエルリーナを始め多くの人々が居るそこへエルヴィラ、アンナ、オッタヴィオが出て来る、彼等

は皆假面をかぶつて居て復讐を誓ふ。

ジオバンニは機會を見て、うまくツエルリーナー一人を連れて出て行く、併し此れを見て假面の三人は面を取り去りジオバンニに肉迫する、けれどもジオバンニはうまくオッタヴィオの劍を打ち落して逃げてしまふ。

第二幕は夜のセヴィラの街上である、ジオバンニとレポレロとはエルヴィラの家の前に現はれる、彼はエルヴィラが美しい小間使を雇つた事を聞き知つて、之を誘惑せうと思ふのである、エルヴィラが窓の所に居るのを見て彼女は彼女を呼びかけ、すつかり前非を悔ひて居ると云ふ、彼女

は同情して下へ降りて来るが、其間に彼は自分の上衣をレポレロに着せてしまふ、エルヴィラは夫れとも知らずに眞のジオバンニと信じて話かける、突然隠れ居た本物のジオバンニが大聲を立てる、彼女は驚いて飛び去る、彼は其あとでセレナードを歌うて美しい小間使を呼び出しにかゝる、そうして夫れがほとんど成功せうとするとき、武装した村人をつれたマゼットが出て来る、彼等は悪漢ジオバンニを探しに來たのである、併し彼はその召使の風をして居るので人々を騙してうまうまと去らせる、彼はあとに残つたマゼットに逆襲する、マゼットの聲を聞いてツエルリー

ナは走り出て来た。

本物のレポレロの方ではエルヴィラから逃れ様と焦せつて居る、然し彼は其中にマゼットやツエルリーナに會ひ、又アンナ等にも發見せられて、ひどい目に會ふ、彼は仕方なく假面を取り去つて自分はジオバンニでない事を現はす。

次の場面は墓場である、ジオバンニはレポレロと一緒に居る、其處に嘗て彼が殺したドン・ペドルの石像がある、然るに驚いたことには、其墓が動き出す、そうしてジオバンニに貴様は明日までに死なねばならぬと豫言する、ジオバンニは嘲笑して此の石像に明日の宴會には招待せうと約束する。

束する。

場面が宴會場と變る、當日には多くの人々がやつて来て今や盛に笑談して居る、不氣味なノックが聞えて来て、ジオバンニの戸を叩く者がある、戸を開けば石像が入つて来る、ジオバンニとレポレロを除いて他の人々は膽を冷して逃げ去る、ペドルの像はジオバンニの手を握る、其手は大理石の如く冷たい、ジオバンニはゾツとする、幾度か彼は彼れに悔悟をすゝめるがジオバンニは従はない、沈黙して居るのみである、終に最後が来た、部屋は暗黒になり、悪魔が四方から現れ、そうして氣味の悪い合唱の中にドン

●ジオバンニを捕へて地獄へと引張つて行く、幕は下る。

三、フイデリオ (二幕)

ベートオフエン作曲

ゾンライトネル作詞

登場人物

ドン・フェルナンド (司法大臣) …………… パリトン
ドン・ビザロ (典 獄) …………… パリトン
フロレスタン (囚 人) …………… テノール
レオノーレ (其の妻フイデリオ) …………… ソプラノ
ロ ッ コ (獄 卒) …………… バ ス
マルツェリネ (其の娘) …………… ソプラノ

ヤ キ ノ (門 番) テノール
其他兵士、囚人、人民等
場 所
セヴィラの近くにある獄

此のフィデリオはベートオフエンの唯一の歌劇であることは大に注目せられて来たものである。

此の初演は一八〇五年十一月廿日にウインで行はれた、この時は三幕であつたが少しく長すぎたので一般には大きな評判を起さなかつたらしい、それを後にヴロイニングといふ人が手を入れて二幕物として公開したが、それも失敗

に終つた、次には復トライチュケといふ人が手を加へて終に三度目に成功したのである。

此れは古來のオペラ中最も優秀なもので、其音楽も非常に莊嚴を極めて崇高である、そして内容も高尚なる感情に満たされたもので、夫婦の情愛を主題として極めて道德的で野卑な所は一つもない。

その荒い筋書は斯うである、スペインの貴族のフロレスタンがドン・ビザロといふ典獄と争つた事があつた、其のためビザロに憎まれて陰謀によつ捕へられて獄に投せられ死に瀕して居た、然るにこのフロレスタンの妻にレオノー

レと云ふ女がある、彼女は其夫の危機を聞いて大に驚き、夫を救はんとして男装して救助に行く決心をする、オペラは此處から始まるのである。

第一幕には此の男装のレオノーレが現はれる、彼女は夫の入つて居る獄に雇はれて住み込み名をフィデリオと改め夫を救ふために苦心して居るのである、然るにこのビザロの獄卒にロツコと云ふ者があつて、其娘にマルツエリナと云ふものがある、彼女は窃にやさしいフィデリオの容姿に思を焦して居る、然るに此の獄に門番ヤキノといふ若者があつて彼はマルツエリナに戀して彼女に結婚を迫つて居る

併しフィデリオを思つて居るマルツエリナは、なるべく此れを避けようとして居る。

次にはロツコとフィデリオが出るロツコはフィデリオの忠實に働くのを賞めてマルツエリナとの婚儀を約する。

第二場ではビザロへ司法大臣なるドン・フェルデイナンドから獄を巡視に行くと言ふ訓示が来る、司法大臣はビザロの仕業に勝手な振舞があるのを聞き、其れを調査して無實の囚人を放免せうと思つて居るのである。

ビザロは驚くこと夥多しい、若しも司法大臣が巡視に来たならば自分のフロレスタンに對することが暴露するから

である、故に彼はフロレスタンを早く殺してしまへどロツコに命令を發する、然るにロツコは辭したので詮方なく自分でやらうと思つて、其屍體を埋むべき墓穴を掘ることを命ずる、フィデリオはこのビザロの言葉を漏れ聞いて大に驚き直ちに夫を救はねばならぬと決心する。

第三場では囚徒の合唱に始まり次にはビザロとロツコとの謀議がある。

第二幕では益緊張して來る、第一場フロレスタンの幽閉された窖の場である、死に瀕せるフロレスタンは夢に妻を見て思慕の情を歌ふ、ロツコはフィデリオを手助けさせて

穴を掘つて居る、此時フィデリオは其處に倒れた囚人が夫フロレスタンなる事を知つた。

此時ビザロが登場してフィデリオは彼方に行けとて退けた、そうしてフロレスタンを殺さうとする、其時フィデリオは飛び出して夫を掩ひ短銃を擬してビザロに向うた、銃の音と共にビザロは倒れる。

其時恰もトロムベットの音が聞へて司法大臣フェルデインンドの來着を報ずる、ビザロは人に助けられて外に出され、後にはフロレスタン夫妻が互に再會を喜び合ふ、その二重唱を歌ふ。

第二場ではフェルデインンドは囚徒を放免する、そうしてビザロは罰せられる、フロレスタンは名譽の地位を得て新しい幸福の生活に入ることが出来た。
 マルツエリナはヤキノと結婚する、そうして人々の歡喜の合唱と共に幕となる。

四、自由射手 (三幕)

カール・マリア・フォン・ヴェーバー作曲
 フリードリッヒ・キント作詞

登場人物

- オットカー伯爵……………(ボヘミアの貴族)……………バリトン
- クローノ……………(森林監守人)……………バス
- マックス……………(若き林務官)……………テノール
- カスバ…………………………バス
- キリアン……………(富める百姓)……………テノール
- 隠者……………(悪魔の獵夫)……………バス
- アガート……………(クローノの娘)……………ソプラノ
- エンヒェン……………(其の從兄弟)……………ソプラノ

此のオペラのテクストは北國の傳説から其材料が取られたもので、森の悪魔が射手に魔力で作られた弾丸を與へるそうして其弾丸は決して的を外さないと云ふのに基いたものである、ボヘミヤの貴族の森林監守長なるクーノが其職を務めて居るには餘りに老いたので其後繼者として其娘アガーテと婚約あるマックスと云ふ非常に巧みな射手を推選しようとする、オットカー伯爵は若しも此若者が來るべき獵の競技に勝利者となつて其腕を證明したならば夫れを許さうと云ふ。

此の劇中の悪漢はカスバと云ふ人間である、彼は悪魔ザ

ミエルに其身を賣り、又竊にアガーテを愛して居る、故にマックスを陥れて自分の身代りにザミエルにマックスを與へようと思ふ、何故ならば自分と悪魔との契約の期限が間近かに迫つて來て居るのである、そうして期限がすんだら靈魂を悪魔に渡さねばならないからである。

悪魔の力を借りてカスバはマックスをして其の試合の練習會に數度失敗せしめる、マックスは自分の運の悪いことを思ひ、深い憂鬱に陥る、此の機會に乗じてカスバは彼に「ザミエルの名に於て」どの言葉を繰返しさへすれば必成功すると教へる、彼は其言の通りにやつて見た、不思議なる

かな、よく命中し、空高く飛べる鷺を射落す事が出来た。

此の手を以てカスバは容易くマックスを誘惑してしまふ
そうして彼はマックスに、若しもマックスが「狼谷」へ真
夜中に行つてザミエルに會ひ、彼れの助けで悪魔から魔の
彈丸を得ることが出来たならば競技會に大勝利は疑無しだ
と教へる、以上は第一幕である。

第二幕はクローノの家である、其處にはアガーテが居る、
彼女は来るべき悪を豫知するやうな氣持になつて居るので
暗い氣分で居る、而して森で會うた隠者が彼女の来るべき
危険を注意して、其の悪を避けるためにと薔薇の花を與へ

たことを思ひ出す、そうして祖先の肖像が壁間から落ちた
事も氣懸りである。且又憂鬱な顔をしてマックスが現はれ
て来たことも、何か前途に悪があると云ふ信念が確めさせ
られるのである。

マックスの方でも不安で居る、彼は色々な奇妙な音で苦
められた、そうして彼の眠りは屢々幽靈のために妨げられ
た、しかし彼は狼谷へ其真夜中に出かけて行つた、鬼火や
骸骨や、奇なる生物が彼を恐れしめた、又其中に彼の母の
靈が現はれて彼に用心せよと注意した、併し彼は恐ろしき
に打ち勝ちつゝカスバと共に指定の場所に來た。

悪魔ザミエルは呼びに應じて現はれる、カスバは悪魔に新しい犠牲を連れて来たから、自分の靈魂は奪つて呉れるなどいふ、悪魔は諾した、七個の彈丸は鑄られる、其中の六個はマックスによつて自由に用ゐられるのである、併し他の一個は悪魔の意志のまゝになるのである、七番目の彈丸にかゝつて居る運命のことには少しも氣がつかずにマックスは其れを承知した。

カスバは悪魔に其の彈丸でアガーテを殺して仕舞へどすゝめた。

第三幕はクローノの家である、アガーテは婚禮の用意をし

て居る、そうして自分の見た夢をエンヒエンに語つて聞かせる、彼女は自分が鳩になり、マックスが自分を撃つたと云ふのである、そうして鳩が落ちた時に彼女は我にかへり落ちた鳩は悪鳥となつて彼女の足下に横つて居つたと云ふのである。

斯様に夢によつて氣を腐らして居るが、其上又婚禮の花環が間違うて葬式の花環に作られたことなどがあつて、益々氣持ちが悪くなる。

併し彼女は森で隠者から婚禮の時の爲とて與へられた薔薇の花のことを考へて僅かに慰められて居る。

遂に仕合の時が来た、伯爵とその家臣はこの大仕合を見に集まつて来た。

マックスは六個射た、見事命中した、彼は伯爵の命によつて第七弾即ち悪魔の弾丸で其處に飛んで居る鳩を撃つように要求せられた。

彼が第七弾を打つや否やアガータは倒れた、併し隠者のバラの花は彼女を守つて居た、ザミエルは其代りに第七弾をカスバの胸に當てた、カスバはザミエルを呪ひマックスの弾丸の秘密を暴露して死んだ。

伯爵はカスバの死体を狼谷に捨てさせ、又マックスを責

める、この時先きに薔薇の花を興へた隠者が出て来て伯爵を宥める、そうしてマックスは結婚を許されて人々の合唱の中に幕が下る。

五、ルチア デイラムメルモール (二幕)

ガエータノ・ドニツエツタイ作曲

カム マ ラ ノ作詞

登場人物

ヘンリー	……	バリトン
エドガー	……	テノール
レイモンド	(家庭教師)	バス
アーサー	……	テノール
ノーマン	……	テノール
ルシー	(ヘンリーの妹)	ソプラノ
アリ	(ルシーの友人)	メゾ・ソプラノ

其他貴婦人騎士小姓等

時 十六世紀

所 スコットランド

此のオペラは三幕物でカムマラノの臺詞によつたものである、初演は一八三五年ネーブルスで行はれた、此のオペラは初演の時に出演したベルチアーニ夫人とデューブレ氏の兩人のために書かれたものである。

このオペラの主題はウォルタ・スコットの「ラムマーモアの花嫁」と云ふ小説から取られたもので、場面はスコットランドである。

ラムマーモアのヘンリー・アシュトンが家運の挽回を計らんが爲めに、其の當時の政治に對する運動に加入して居た爲めに起る政治的危険を防ぐために自分を救ふべく妹ルシーとアーサー・バックローとの結婚を計つた。

此のヘンリー・アシュトンにエドガー・レイヴンズウッドと云ふ政敵があつたが、此のエドガーは密にルシーに思ひをよせて居た、そしてルシーの方でもエドガーの愛に報いて居つた、彼が佛國へ使に行く出發の日の夕方ルシーは彼に結婚を約した。

エドガーの留守の間、エドガーから來るルシーへの手紙

は彼の兄によつて横取りせられた、そうして兄は又悪計を廻らしてエドガーの不信を暗示するやうな方法をとり、終にはエドガーの不信を確證せしむるやうな賈の手紙を彼女に示した。

彼女は愛人の不實に對する悲しみに打負かされ、又其上に兄の絶えず迫る要求に、止むなく終に、アーサーとの結婚を承認した。

そうして結婚の契約は盛大なる儀式の中に行はれて、ルシーが證書に彼女の名を書き入れたときにエドガーが現れ出る。

ルシーから彼女のしたことを聞いたエドガーは契約書を足で踏みつけ、ラムマーモーア家に呪の言葉を投げ、悲痛な怒りの中に出て行つた。

ヘンリーはエドガーを追ひかけた、そうして激しい喧嘩が起つた、併し夫は大事にはならなかつた。

然るに新しい夫婦が部屋を出て行つた後で、彼等の部屋で大きな騒ぎ音が激げしく聞えた、人々は駆けつけた、そうしてルシーの爲に傷けられて重傷に倒れて居るアーサーを發見した、ルシーは悲みの餘り狂人になつたのである。彼女が正氣に返へつた時、彼女は自分のした事と、その

現在の位置を思ひ、恐ろしさのために死んだ。

彼女のかゝる運命を露知らず、エドガーはヘンリーとの決闘の場所として定められた、レイヴンズウッドの墓地へ行く、そうして敵の来るを待つて居る時、寺の鐘が聞え、そうして其處へレイモンドが来てルシーの死んだことを告げる、此れを聞いたエドガーは自分の浅慮を嘆いて自らその胸を刺して死ぬ、かくして此の哀れな話は終つた。

六、ファウスト (五幕)

シャルル・グノー作曲

バルビエ及びカレー作詞

登場人物

ファウスト	テノール
メフィストフェレス	バス
ヴァレンティン	バリトン
ワーグナー	バリトン
マルガレーテ	ソプラノ
ジーゼル	メゾソプラノ
マルタ	コントラルト

時 其他兵士、學生、村人、精靈等
代……………十六世紀
場 所……………獨逸

此のグノーのファウストはゲョエーテの悲劇によつてバルビエとカレーどが臺詞を書き、其れによつてグノーが作曲したものである、このオペラの初演は一八五八年六月九日でパリのテアトル・リリックで行はれたのである。

此はゲョエーテの作の第一部のみで、其筋はゲョエーテのものを非常に忠實に取扱つて居る。簡單に云へば斯うである。

人間の智慧と云ふものに飽き果て、自然の神様に敵しかねる自分の能力にすつかり失望した老學者なるファウストは、惡魔メフィストフェレスに援助をたのむ、そうして若しも自分を昔の青春時代に返へして呉れるならば、其代償として彼の魂を與へんと約する。

メフィストフェレスは此を諾して直にファウストを若返へらせ、彼れに頗る美しい小女なるマルガレーテの幻像を見せるや直に、ファウストはその小女に魂を奪はれ戀心頓に生じ深く根ざす。

メフィストフェレスとファウストは旅に出掛ける、そう

してケルメスで彼女に會ふのである、彼女の兄バレンティンは軍人であるが、その戦地に赴くときにマルタと云ふ婦人に其妹を託して去る。

彼女との最初の會合は偶然のことであつた、併し次にはファウストは彼女が自分の庭園に居るのに會ふ、悪魔メフイストフェレスの魔力によつて此マルガレーテの愛を贏ち得る、彼女の單純なる愛人ディーベルは捨てられてしまふ、そうしてディーベルの花環はファウストの與へたまばゆい寶石を見た彼女の目には實につまらなく見へる、彼は花環を捨て、しまふ。

ヴァレンティンは戦争から歸つて彼女のことを知つて、其誘惑者たるファウストと争ふ、而して決闘したがメフイストフェレスの悪計によつて直ちに殺される。

彼女は自分の爲めに斯様な不幸が出来た事を悲んで氣が狂ひ、誤つて其子を殺す、そうして彼女は投獄せられる。

ファウストとメフイストフェレスは獄中のマルガレーテを訪れて共に逃亡をすゝめるが彼女は之を拒絶する、そうして熱心に祈る、彼女は自分の罪を悔いて居るのである、やがで倒れる、そうして自分の作つた破滅によつてメフイストフェレスが勝利を得ようとして居るときに、天使が多

く現はれて、奇しき音楽の中にマルガレーテの靈を天に持ち去る、メフィストフェレスとファウストは其榮光に打たれて倒れる。

第一幕は其前奏曲と同じ気分である、幕が開くとファウストの長い獨り語に始まる、彼は人生の充たされざることを嘆いて居るのである、卓子の上は壘がある、其中には毒がある、彼は毒を飲んで死なうと思ふ、其時外に美しい娘達の合唱や若い青年等の神への讚美歌が聞えて来る、彼は毒を飲むのを躊躇する、そうして悶へる、その時メフィストフェレスが入つて来る、そうして二重唱がある。

第二幕はケルメスであつて其處では合唱が重要な位置を持つて居る、第一場面では學生、軍人、老人、娘等の合唱がある、そうして此場面は頗る生氣が溢れて居る、第二場面はヴァレンティンがやさしい唄を歌ふ、そうして次には醜い氣持の悪い「酒の歌」がメフィストフェレスによつて歌はれる、メフィストフェレスはマルガレーテの健康の爲に妖術を以て火焰を其杯に満す、ヴァレンティンは無禮を怒つて前に飛び出すが、自分の手にあつた刀が折れた、之を見て人々は悪魔の仕業と知る、而して刀の柄の所で十字架を作りメフィストを追ふ、悪魔の去つた後は又賑やか

な楽しいヴァルスで終る。

第三幕は庭園の場である、之は非常に幻想的な美しさに充ちたもので、この中にはディーベルの歌ふ短い美しい唄がある、テノールで情熱的なものである、マルガレーテが糸車で歌ふ美しい悲しい唄がある、又名高い寶石の唄がある、後にはマルタが入つて来て逍遙しながら四人で四重唱を歌ふ、次でマルガレーテとファウストを残して他は去る、星が輝き初めたので、ファウストは別れるが其時にも二人は美しい二重唱を歌ふ、マルガレーテは全く戀の虜となつて居るのである、最後にマルガレーテが窓で歌ふ美しい唄が

ある。

第四幕は寺院の場である、マルガレーテは泉の所で少女達に責められて自分の不運を嘆いて居る、次の場面は寺院の前になる、其處へ兵士が勇ましく来る、そうしてヴァレンティンも出て来てマルガレーテを捜す、ファウストもメフィストフェレスも出て来る、メフィストはセレナードを歌ふ、之を聞いてヴァレンティンは怒つてファウストと決闘して死ぬ、人々はマルガレーテやディーベルと共に出て来てヴァレンティンを介抱する、ヴァレンティンはファウストを呪うて死ぬ、マルガレーテは失神する。

第五幕は牢獄である、マルガレーテは其嬰兒を殺した罪で入れられて居るのである、ファウストとメフィストが来る、そうして逃げようとするが彼女は之を聞かないをうして清く高い歌を歌つて倒れる、次て神の裁斷が下る。

七、カルメン (四幕)

ジオルヂュ・ビゼー作曲
メイラック及びアレヴィ作詞

登場人物

ドン・ホーセ……(伍)	長……テ
エスカミロ……(闘)	牛士……バリト
ダンカイロ……(密輸)	入者……バリト
レメンダド……(同)	上……チ
スニガ……(隊)	長……バ
モラレス……(伍)	長……バ
ミカエラ……(百姓の許婚)	ソ
	ブラ
	ノ

フラスキタ……(ジブシイの子、)
メルセデス……(カルメンの友人)……メゾ・ソプラノ

カルメン……(煙草工女)……ソプラノ

時 代……………一八二〇年頃
場 所……………スペインのセヴィラ

ビゼーは十九世紀のオペラ界の大立物である、ロッスイーニは秀れたオペラ作者であつた、ドニゼッティ・ペリーニも偉かつたに違ひはない、併し彼等は之を細かく調べると、單に前人の跡を繼いだに過ぎなかつた、このビゼーは全く旗色が違ふ、彼の前には前の三者も影がうすくなるのである。

カルメンは四幕物のオペラで、作曲者が西班牙人で無いのが不思議に思へる程西班牙の色彩の強いものである。

カルメンはスペインのジブシイの娘である、彼女はこのオペラの主人公で其性格の放奔で輕浮な點より、實によく西班牙風の性格を完全に具備した女であると云へる。

第一幕はセヴィラの町の廣場で多くの兵隊が居る、其處へミカエラがホーゼを尋ねて來るが居ないので失望して歸る、兵隊の中には隊長スニガ及び伍長のドン・ホーゼが居る、やがて工場の仕事すすんで女工が出て來る、若い男や兵隊は夫れを見て居る、工女の中には人々にもてはやされ

て居るカルメンが居る、彼女は其中でハバナを歌ふ、歌ふ中に盛にホーゼに媚を送り、遂に花を投げつけて行く、ホーゼは其れを取上げる、其時ミカエラが又やつて来て母よりの手紙を示して二重唱を歌ふ。

すると急に工場の中で騒ぎが起つた、それはカルメンが一人の工女と喧嘩をして其相手を傷けたと云ふのである、隊長はホーゼに命じてカルメンを縛らす、そうしてホーゼに監視を命じて去る、隊長が去るとカルメンは縛を解いて貰はうと思つて色々な言葉を弄する、ホーゼはすつかりカルメンに魅せられてしまふ。

スニガはホーゼに其の部下の者一人と共にカルメンを護送することを命ずる、カルメンは平氣なもので、途中兵卒を突き飛ばして逃げる。

第二幕はセヴィラ郊外の旗亭である、多くの人が賑やかに踊り狂つて居る、カルメンも居て、ジブシイの唄を歌ふスニガはカルメンの陰氣にして居るのを見て、彼女にホーゼはもう許されたと語る、ホーゼはカルメンを逃した罪で入牢させられたのである。

其の時闘牛士エスカミロが通る、彼は人々の前で其腕を誇りながら名高い「トレアドル」の唄を歌ふ、やがて遠く

でホーゼの聲がきこへる、カルメンは喜ぶ、そうしてカステタネットの伴奏で歌ふ、ホーゼは時間が来たから營所へ歸らねばならぬと言ふ、けれどもカルメンは聞かない、脱營してジブシイの中に入り自由に遊ばうと云ふ、其時スニガが来てホーゼと共に歸營せうとするが他のジブシイが来て無理にスニガをも密輸入者の中に入れてしまふ。

第三幕は山寨の場で峨々たる山に圍まれた所である、多くの密輸入者が居る、其計略を議して居る、」そうしてダンカイロはレメンダドと一所に行く、ホーゼとカルメンは残る、ホーゼはジブシイの中へ入るは人つたが、其階級が違

ひ、又彼等と性格が違ふ、其感情に於ても柔かで良心がある、而して今や後悔して母のことなども考へる、之がカルメンには氣に喰はない、漸次カルメンの愛はさめて来る、その時ミカエラがホーゼを捜しに来る、そうして名高いミカエラの唄を歌ふ、其時闘牛士エスカミロが出て来てホーゼと話す、彼等は言葉争ひの後決闘するがエスカミロの危くなつた時カルメンが出てエスカミロを掩ふて助ける。

ホーゼはカルメンに裏切られたのを知つて怒に燃へて居る、其處へミカエラが来て母の病の重いことを告げるので仕方なくミカエラと一緒に出て行く。

第四幕はマドリッドの場所で闘牛が將に行はれんとして居る、行列が来て今日の花形エスカミロが花々しい服装でカルメンと共に出て来る、此所でエスカミロはジブシイを招いて其の腕前を見せようと思うのである、ホーゼも来た、彼はカルメンに最後の切願をしに来たのである、カルメンはホーゼの居るのに注意せられたが、驕れる女は念頭にも置かない、カルメンはホーゼの誘ふがまゝに場前に出た、ホーゼはカルメンに再び心を翻がへして呉れと云ふ、彼女は斷乎として今は已に彼女の愛は彼を去つてエスカミロにあると叫ぶ、ホーゼは彼女を連れて去らうとして腕をつか

んだがカルメンは身を翻してホーゼが與へた指環を地に投げて入口の所まで逃げ去つた、此ときエスカミロの勝利が報せられた、ホーゼはカルメンに追つき痛憤の極、嫉妬の及はカルメンを刺す、人々は驚いて出て来て呆然として立つて居る、其間にホーゼはカルメンを抱いて倒れる、痛々しいオーケストラの音がすべてを掩ふてしまふ。

八、リゴレット (三幕)

ジュゼツベ・ヴェルディ作曲

ピアール・ヴェ作詞

登場人物

マントゥア公爵	……………	テノール
リゴレット	(セムシのマントウ)	バリトン
	(公爵の道化者)	ソプラノ
チルダ	(リゴレットの娘)	……………
スバラフチレ	(刺客)	……………
モンテローネ伯爵	……………	……………
チェプラノ伯爵	……………	……………
マダレーナ	(スバラフチレの妹)	……………

シオヴァンナ(リゴレットの召使)……メゾソプラノ
 チェアラノ伯夫人……メゾソプラノ
 ボルザ(マントゥアの臣下)……テノール
 其他宮庭人、小姓及び召使等
 代……十六世紀
 時
 場 所……マントゥア及其附近

此リゴレットはヴィクトル・ユーゴーのル・ロア、サミューズ(歡樂する王)を基として作曲したもので、其臺詞はピアージュエによつたものである、初演當時伊太利にて名聲甚た高かつたものと云ふ、其一般に持て囃されて、理解されることの最も早つたのは此のオペラが第一等であつた

と云はれて居る。

第一幕の第一場は公爵邸の舞踏室である、舞踏は今や酣である、其處へ公爵は其の臣下なるボルザと出て来て、公爵は今新しい女を征服しようとしつゝあるのである、と語る、彼は三ヶ月の間教會内である若い美しい娘に目をつけて居たのである。

併し彼は彼女の戀人らしい男に屢々訪問を受けて居ると云ふことの外は何も彼女について知らない、其こともボルザに話すのである、其時人々が入つて来る、此中でチェアラノ伯爵夫人が目立つて美しい、公爵はすぐ、その夫人に

注目する、彼は巧みに夫人に話しかける、チエブラノ伯爵は不安である、公爵はチエブラノ夫人と舞踏室へ行つた、やがて公爵が戻つて来てリゴレットにチエブラノ夫人を手に入れる手段を相談する、其處へチエブラノ伯が入つて来る、年老いたるモンテローネ伯の聲がして、やがて入り来る、彼は其娘が最近公爵に欺かれたのを知つて怒つて来たのである、彼は公爵に其罪をなじる、リゴレットはモンテローネ伯に對して嘲笑を浴せる、伯はリゴレットに恐ろしい呪ひをかける、リゴレットは伯の呪に氣絶する位に恐れをなす、何故ならばリゴレットも亦宮庭の人々には知らし

てはないが一人の美しい娘があるのである、そうして今や娘と亡くなつた母親の事を考へて彼の獸心も苦しめられて居るのである、モンテローネ伯は人々に連れられて去る。

第二場面は道路である、リゴレットの小屋が横にあつてその反對の側にはチエブラノ伯の邸がある、リゴレットが出て来る、彼は投げつけられた呪に對して、恐ろしさに震るへて居る、其時刺客スバラフチレが来て用はないかと云ふ、リゴレットは何れ相談することがあらうと答へて別れる、彼は庭に入る、其娘チルダは家から出て来て喜んで迎へる、彼女は父の物思ひに沈むのを見て其理由を尋ねる、

彼女は又殆んど記憶して居ない母のことを色々と質問する、リゴレットは其質問を避けて、夫れを聞いて呉れるなど云ふ、彼は娘を抱く、そうして心の中で呪を思ひ出して決して外出してはならぬと云ふ、娘は唯日曜日に教會に行くだけだと云ふ、併し彼女は目を交はさなかつた、青年（マントゥア公の假装）については何も語らない、リゴレットは召使を呼ぶ、ジオヴァンナといふ女中である、リゴレットは此女にもよく保護を頼む、やがてリゴレットは娘と別れて出て行く。

すぐに學生に假装した公爵が入つて来て、彼は金を與へ

てジオヴァンナを瞞す。

チルダは驚くが、すぐにかの學生であると氣が付く、そうして愛の二重唱を歌ふ、公爵は自分はワルテル・マルデと云ふものだと言つて去る、チルダはこの學生の戸外に去るのを見て居て美しい唄を歌ふ。

やがて夜になつた、其時一群れの人々が假面で出て来る、リゴレットは驚いてしまふ、併し彼れの恐れは彼等は公爵の命令でチェブラノ夫人を盗みに來たのであると云ふので安心させられる、リゴレットはチェブラノ邸は反對側の家だと教へる、假面の人々はリゴレットも來てこの仲間に入

つて手傳へとて、巧みに仲間に入れてマスクを被らせる、其隙にヂルダは捕へられて持ち運ばれてしまふ。

人々は皆逃げ去つて、後に残されたリゴレットは驚いてマスクをとると、家の中にはヂルダの居ないのに氣が付く彼は自分が計略にかゝたのを知り、天罰の恐ろしさを知り卒倒する。

第二幕は公爵の邸である、公爵は一度別れたが、又ヂルダの家を訪れた、併し彼はヂルダの居ないのに氣がつく、彼は自分の家來の手によつて盗まれたのを知らずに嘆いて居る、自分の邸に歸ると、やがて臣等がリゴレットの愛娘

を盗み出したと云ふ、公爵はそれがヂルダであることに氣がつくと喜んで見に行く、其時リゴレットの聲が外に聞える、彼はヂルダの行方の手掛りを求めに來たのである、リゴレットは小姓に公に會ひたいと云ふ、人々は入つて來てリゴレットに公は今會はれないと云ふ、リゴレットは此處に居るに違ひないと思ふ、其時娘が出て來て父に事實を打ち明ける、リゴレットは初めてそのいきさつを知つて此處を去らうと云ふ、且つヂルダが頼むにも拘らず必ず復讐してやらうと云ふ。

第三幕はミンチヨ河畔の淋しい所である、左には汚ない

家がある、夜である、スバラフチレは家に居て外に何が起つて居るのも知らずに、革帯を磨いて居る、リゴレットとヂルダが家に近付き、リゴレットは娘に公爵を愛して居るのかと問ふ、娘はうなづく、そうして公爵を殺して呉れるなど頼む、兩人は家の陰に入る、其時に公爵がスバラフチレの家に入つて来て酒を命じて名高い「女心の唄」を歌ふスバラフチレは酒を持つて来る、そうして二度天井を突いて妹マダレーナに下りて来る合圖をする、公爵は此のマダレーナを抱いて唄を歌ふ、此處に名高い四重唱が壁を隔てゝ歌はれる。

公爵はリゴレットに頼まれた刺客が機會を窺つて居るとも知らずにマダレーナと遊んで居る、リゴレットは娘に公爵の移り氣の多い男であることを知らすためにヂルダに隣りをのぞかせる。

公爵は寢室に行つて直ぐ眠つてしまふ、リゴレットは娘にヴェロナへ大急ぎで行け自分もすぐに行くと言ふ、彼女は不精無精に出て行く、リゴレットはスバラフチレに約束額の半分を仕拂ひ、残りは公の死体を受け取つてから拂ふと約する。

リゴレットは娘の行つた方に急ぐ、併し娘は男装すると

すぐに引き返へして家の中に何事か起るを見ようと覗いて居る、スバラフチレはマダレーナと共に入つて来る、彼女は公爵を殺すのを惜しがつて居る、そうして兄に反對にリゴレットを殺して金を取るやうにすすめる、スバラフチレは聞かない、併し妹が切願するので若しも彼が夜半までに來たならば公爵の代りに殺さうと云ふ、チルダはこれ聞いて、愛人なる公の爲めに身代りにならうと決心する、そうして彼女は戸を叩く、捕へられて殺されて袋の中へ入れられる、リゴレットは直ぐに戻つて來た、彼は公爵の死体を受取りに來たのである、スバラフチレは袋の内容がリゴ

レットに見られるのを恐れて河の中に投込まうと主張するリゴレットも賛同する、そうして刺客を去らす、其時公爵の歌ふ聲がしたので彼は不思議に思ひ袋の中を見ればチルダが半死になつて現れた、チルダは事情を語つて死んだ、リゴレットも悲みの爲めに氣が狂うて死んだ、斯くして悲劇リゴレットは終る。

九、イル・トゥラヴァトーレ (四幕)

ヴェルデイ 作曲

カムマラノ 作詞

登場人物

レオノーラ(貴婦人)……ソブラノ
 アッチエナ(放浪のデブシー)……メゾソブラノ
 ルイ(マレンリコに付)……テノール
 イネ(レオノーラの侍女)……ソブラノ
 マンリコ(ビスケーのプリンス
 の下にある若い長官)……テノール
 際はルナ伯の實弟
 フェルランド(守護の長、ルナの臣)……バス

其他 使者、獄卒、兵士ジブシイ等
時 代……………十五世紀の中葉
場 所……………ビスケイミアラゴン

此のトゥラヴァトーレ四幕のオペラはカムマラノの作詞によつて作られたもので其初演は一八五三年に行はれた。幕が開くとアリアフェリアの宮殿で深夜の場面である、其處では古い召使のフェランドは其仲間に分等主人ルナ伯爵の弟なるガルチアの運命を物語つて居る、彼の話によれば、前代の伯爵には二人の子があつたが、弟なるガルチアはまだ搖籃の中に居る時に年老いたるジブシイの女に

魔法をかけられて、日に／＼瘠せて行つた、其の爲めにそのジブシイは捕へられて焼き殺された、ジブシイの娘アツチエナは怒つて復讐の爲め病のガルチアを盗み出した、數日を経て人々はジブシイを焼いた灰の中から小兒の骨を發見した、故に盗まれた子供はきつと其娘に焼き殺されたに違ひないと思はれて居ると云ふのである。

オペラの初めにはガルチアの運命は、はつきり判つては居ない、此の老いたる召使が其話を終つて仲間と一緒に去つてしまつた。

其後ヘルナ伯は入つて来る、彼が戀して居るレオノラの

部屋の所に立ち止つて居る、かれの聲を聞いてレオノラは庭園に出て来る、彼女は其は伯ではなくて音楽詩人なるマンリコであると思ふて居る、彼女はさる日の競技會に於いて優者としての彼を見てからは強い愛を此のマンリコに捧げて居る、然るに彼女は其れが伯であることを知つて、失望してレオノラが挨拶する時にマンリコが現はれて彼女と伯と話すを見て彼女の不實を責める、彼女は驚いてマンリコの處へ走り行つて言譯をする、伯はマンリコに決闘を申込む、而して彼等は劔を抜いて場面を去る、あとにはレオノラが氣絶して倒れる。

第二幕はジブシイの天幕である、其處ではアツチエナが伯との決闘で負傷したマンリコに會てフェルランドが彼の仲間の者等に語つて聞かせたのと同じ話をして聞かせて居る、併しフェルランドが云つた話の外に彼女の母の殺されたのを見て怒り、復讐のためにルナのガルチアを捕へ來つて火の中へ投げ込んだが誤つて彼女自身の子を投げ込んだと云ふことをつけ加へた。

アツチエナの話の終つた頃使者が入つて来る、そうしてマンリコをカステルの城を守る爲に呼びに來た、使者は又レオノラがマンリコが死んだと信じ今夜ある僧院に入つて

尼になつて仕舞うと告げる、彼は彼女が寺に入らうとする
ときに、恰もマンリコを奪ひに來た伯と争つた後ルイツの
助けによつて彼女を救ひ出しカステルに連れ行く、カステ
ルは直ちに伯の軍勢に圍まれる、

第三幕では伯爵の天幕が展開せられる、フェルランドが
入つて來て密偵らしいジブシイ女を捕へたと云ふ、そうし
てこの女はガルチアを盗んで火に焼いた女に違ひない、且
又マンリコは彼女の息子であるといふ。

伯は好い物を捕へたと喜ぶ、而して城の前で彼女を火焙
りにしろと命ずる、ルイツはそれを見て驚いて主人マンリ

コに報告する、マンリコは驚いてアツチエナを助けるため
に兵を率ゐて城を出て行く、彼は奮戦したが負けて捕へら
れアツチエナと同じ獄中に入れられる。

第四幕である、レオノラはマンリコやアツチエナを助け
に牢に近附く、其時死刑を告げる鐘が鳴る、而してミゼレー
レが歌はれる、レオノラは伯にマンリコを逃がして呉れど
云ふ、終に彼女は彼の生命を助けて呉れたならば自分の身
を捧げようと云ふ、伯は直ぐに承諾する、彼女は人々の油
斷を見て毒を飲む、そして直ちに牢へ走り行つてマンリコ
等に報告してマンリコに逃げるようにすすめる、併しマン

リコは彼女が其愛を伯に賣つて自分を助けるものと誤信して夫れを拒む、レオノラは毒が廻つて倒れる。

此時伯が入つて来て此有様を見て大に怒りマンリコの處刑を命じる、彼は引張り出されてアツチエナの牢の前で處刑された、此時アツチエナは彼女の秘密を明かして伯に今伯は實弟を殺したのであると告げる、且つ自分は到頭母の讐を復することが出来たと云つて倒れる、跡に伯は後悔の念にかられて無意識になつて倒れる。

一〇、トラヴィアタ (三幕)

ヴェルデイ 作曲
ピアヴェ 作詞

登場人物

ヴィオレッタ (病める女)……ソブラノ
フロラ・ベルグオア (彼女の友人)……メゾソプラノ
シヨルジオ・ジェルモン (アルフレッドの父)……バリトン
アルフレット・ジェルモン (ヴィオレッタの愛人)……テノール
ガストーネ……テノール

ド ヴァン フォール (男爵・アルフレッドの敵) …… パリ・トントン
 グランヴィール (醫者) …… バス
 アンニ (ヴィオレッタの召使) …… ソブラノ
 其他フロラの友人、紳士、貴婦人、ジブシイ、召使等
 所…………… 巴里と其附近
 時 代…………… 一七三〇年頃

此のオペラはピアージュエの臺詞で小デューマの「ダム・オー・カメリア」によつたもので、原作は近代佛國人民生活の種々なる相を描出せんとしたものであるが、此オペラではルイ十四世時代に直してある。

第一幕はヴィオレッタの家の客間で、盛んな宴會が行は

れて居る、其處には肺に腦む美しいヴィオレッタが長椅子に倚つて居る、フロラやオビニー侯爵ドゥフォル男爵等の貴顯紳士淑女が騒いで居る、其等の群集に混つてアルフレッド・ジェルモンといふプロバンスから來て居る若紳士がある、彼はヴィオレッタを戀して居る、宴は益々盛である、アルフレッドは人々のすゝめによつて「酒の唄」を歌ふ、其處は全くの歡樂境である、夫れがすんで人々が舞踏に行かうとする時にヴィオレッタは急に倒れた、彼女は何でもないと云つて人々を去らしめる、アルフレッドは獨り残つて彼女に、斯様な耽溺的な不節制な生活から離れねばなら

ぬと忠告して、自分の思ひを打ち明けた、併しヴィオレッタは自分は毎日歡樂のみを追うて居ねば生きて居られないと云ふ、そうして戀人にはなれないと云ひそへた、併し彼は大きな衝動を受けた。

アルフレッドは他の人々と舞踏をすまして歸つて行く、人々の歸つた後彼女は色々考へる、彼女は此時初めて眞の戀を感じて歡樂を追ふつまらなさを知つた。

外ではアルフレッドの聲が聞える、彼女の心は左に行くべきか、右へ行かんかと迷つて居る、そうして其部屋を去る。

第二幕、第一場、此處は巴里の郊外である、ヴィオレッタとアルフレッドは此處へ人々を避けて住んで居る。

幕が開くと二人が居る、其處へ召使のアンニナが巴里へ行つて歸へつて来る、彼女はヴィオレッタの命令で家財を賣るために巴里へ行つたのである、彼等の家は其れ程窮迫して居るのである、此を見てアルフレッドは耻ぢて自分で金を得る爲めに巴里へ出掛けて行く、其時ヴィオレッタの女友人フロラから夜會への招待狀が来る、而して夫れにツイアルフレッドの父のジョルジオがやつて来る、彼は息子の事で非常に困つて居るのでヴィオレッタに頼むやうに

して家の名譽のために息子と別れて呉れと云ふ、ヴィオレッタは初めの程は應じなかつた、そうして自分のアルフレッドに對する愛が如何に深いかを語る、併し終に彼女は承諾する、彼女はアルフレッドの將來のために自分を犠牲にせうと決心した、アルフレッドの父は非常に感謝して泣いてヴィオレッタを抱く、ヴィオレッタはアルフレッドに宛てた手紙を書いた、其時アルフレッドが歸つて来る、彼女はアンニナに其手紙を渡して窃かに巴里に去つた。

アルフレッドは後になつて手紙で事情を知つて驚き悲む父は其美しい故郷に歸れと云ふが少しも聞かぬ、アルフレ

ッドは彼女がドウフオル男爵の下に走つたのであると誤信して怒つて居るのである、直ちにヴィオレッタを探しに巴里へ行く。

第二場は贅澤に装つたフロラの客間である、フロラと其仲間はヴィオレッタがアルフレッドと別れたことを語り合つて居る、フロラはヴィオレッタか屹度男爵と共に此處へ来るに違ひないと云ふ、アルフレッドは彼女を探しに室に入つて来る、彼はヴィオレッタのことを何も云はない、ガストーネなどと云ふ男と賭をして盛に勝つ。

男爵がヴィオレッタと共に入つて来る、彼女はアルフレ

ッドを見て驚く、アルフレッドは見ぬ風をして男爵に賭を
申込んで又勝つ、やがて食事が出来たので皆は出て行く、
唯ヴィオレッタとアルフレッドが残る、彼は彼女を責める
ヴィオレッタはジョルジオの事をかくしておいて、本當に
自分は男爵を愛して居るのであると云ふ、彼は夢中になつ
て、人々を集めて、其前で彼女から借りた金を返へすのだ
と云ふて財囊をヴィオレッタの前に投げつけた。

ヴィオレッタは氣絶する、其處へ父ジョルジオが入つて
来て人々と共にアルフレッドの亂暴を責める。

第三幕はヴィオレッタの部屋である、彼女は病で臥て居

る、醫者のグランヴィルが入つて来る、診察して後アンニ
ナに病が重くてもう餘命の少いことを話す、アンニナが去
つた後ヴィオレッタはジョルジオから来た手紙を又讀み返
す、其れには約束を守つて呉れた感謝とアルフレッドと男
爵とが決闘をして男爵が傷ついたが治りつゝあることゝ、
アルフレッドは外國に居ること、そうして彼は事情をすつ
かり知つて、近い中に謝罪に行くこと、早く病のなほるこ
とを祈る等のが書いてある、彼女はもう既に遅いこと
を嘆く、其處へアルフレッドが入つて来た、彼は後悔して
居る、そうしてどうぞ許して呉れと云ふ、彼女は許した、

而して病を忘れてもう永久に巴里を去らうなどと云ひつゝ、アルフレッドを抱擁する、彼は其時初めて彼女の青ざめた顔を意識して驚いてアンニナに醫師を呼びにやる、醫者はジョルジオと一緒に入つて来る、ジョルジオは自分のしたことを悔み、改めて娘としようと思つて来た、しかし遅かつた、ヴィオレッタは息絶える、そうして幕は下る。

一一、アイーダ (四幕)

ヴェルディ 作曲

登場人物

アイーダ(エシオピアの奴隷)……ソプラノ
 エチプト王……バス
 アムネリス(埃及王の娘)……メゾ・ソプラノ
 ラダメス(埃及軍隊長)……テノール
 アモナスロ(エシオピア王)……バリトン
 ラムフェイス(高僧)……バス
 使者……テノール
 其他、僧侶、尼、兵士、奴隸、囚人等

時代……ファラオの時代
 場所……メムフィスとテーベ

此のオペラの出所はブーラク博物館長マリエルト・ベイによつて散文に書かれたものを佛譯から更にギツランドーニがヴェルデイの爲めに伊語に翻譯したものである、そしてエジプトのイスマイル・パシャが改羅に新設したオペラ劇場の開場式のため依頼によつて作られたものである、又このオペラは歌劇中で最も長いものの一つでカット無しで演じて四時間と四十分を要すといはれる。

アイーダはエシオピア王アモナスロの娘であるが、戦争の時埃及軍に捕へられてメムフィスの宮殿で奴隸とされて居る女である。

第一幕第一場は宮殿の廣間である、其處にはラダメスとラムフィスが居て頻りにエシオピア襲來のことを語り合ふて居る、ラムフィスは此の戦にはある若い勇ましい武士が指揮官に任せらるゝであらうと云うて居る、一人残つたラダメスは此の若者が自分であればよいと思ふ、而して愛するアイーダと凱旋の後に會ふ樂しみを歌ふ。

其の時王の娘アムネリスが入つて来てラダメスが獨りで熱狂して居るのを見て、近寄つて優しく意中を暗示する、其時アイーダが入つて来て、自分の祖國との戦争を聞いて悲しんで居る、アムネリスは此女奴隸を慰撫する。

やがて王と其護衛兵が入つて来る、そうして使者を引見する、使者はエヂプトが今アモナスロの指揮にあるエシオピア軍の侵略に會うて居ると報告する、王はラダメスを指揮官に任じて之に當らしめることゝした。

總ての人々は此の遠征の準備のために出て行く、あとにはアイーダが残つて身の不幸を嘆いて神に祈る。

第二場はヴァルカン寺院内である。

高僧ラムフェイスや他の僧尼等は遠征を祝福するためにつた、そうしてブタを讚美する唄を歌ふ、ラダメスが入つて来る、高僧は彼に神聖のヴェールを掛け神聖な劍を與へ

た。

第二幕はアムネリスの室である、盛装の女王と奴隷が居る、彼等は凱旋したラダメスの名譽を祝つて居る、アムネリスと奴隷は凱旋の勇士に對する歌をうたふ。

アイーダが入つて来る、アムネリスはアイーダの國の不幸を慰さめる、王女は偽つてラダメスが戦死したと云ふ、アイーダは驚き泣く、之によつて初めてアムネリスはアイーダのラダメスに對する戀を知つて大に怒る。

第二場はテーベの町で王や其臣等が集つて来る、彼等は凱旋の軍勢を迎へようとして居るのである、やがて軍勢が

喇叭を吹きながら歸つて来る、あとには戦車、偶像が續く踊女は寶物を持つて来る、而して最後にラダメスが堂々と現はれる、樂隊は行進曲を奏する、捕虜の中には士官の服装をしたアイーダの父アモナスロが居る、アイーダは驚いて駆けつける。

人々は囚人の赦免を請うたが僧達は彼等を殺せと主張した、併しラダメスは王に説きすゝめて皆を許して自由にさせたが、アイーダの父のみは許されなかつた。

王は賞としてラダメスにアムネリスの手を取らせると宣告した、アイーダとラダメスは失望した、そうして顔を見

合はず、アムネリスは密に自分の勝利を喜ぶ。

第三幕はナイル河畔で月夜である、アイシスの寺院が見える、椰子木は其寺院の半ばを掩うて居る、其寺の中からは合唱が聞えて居る。

ボートが来る、乗つて来たラムフェイスとアムネリスは上陸して寺院へ行く、やがてヴェールを被つたアイーダが用心深く入つて来る、彼女はラダメスが来て呉れるやうに祈つて居る、其時彼女は父が来たので驚く、アモナスロは娘がラダメスと相愛の間にあることを知つて、夫れを利用して自由の恢復を企てた、彼は娘に國では又人々が戦の準備

をして居ることを告げて、ラダメスを通してエチプト軍の取る進路を知らうとする、彼女は一度は忤つたが、終に之に従つた。

ラダメスが来る、アモナスロは隠れる、ラダメスは此町を逃げよう云ふ、アイーダはどの道を取るのかといふ、彼はエシオピア軍を破つた時の道即ちナバタの間道を取らうと云ふ、アモナスロは此時嬉しさの餘り陰から飛び出るラダメスは自分の國を賣つたことを知て驚く、そうして今云つた事を取消さうと努力する、其時寺から出て來たアムネリスが小耳に挿んで嫉妬に狂つてラダメスを賣國奴であると叫ぶ、アイーダとアモナスロは逃げたが、ラダメスは捕へられた。

ると叫ぶ、アイーダとアモナスロは逃げたが、ラダメスは捕へられた。

第四幕の第一場は王宮内の廣間である、アムネリスは失意の状態である、彼女はラダメスに對する愛と復讐とのデイレムマにかゝつて居る、そうしてラダメスを自分の前につれて來るやうに召使に命ずる、アムネリスはラダメスに若も彼がアイーダを捨てるならば生命を助けると云ふ、ラダメスは斷じて應じない、護衛者が現はれてラダメスを裁判の室へ連れ行く、アムネリスはラダメスが引かれて行くのを見て、自分の苛酷さを悔いて椅子に身を投げるやうに

腰かける、ラムフェイスは辯解をすゝめるが、ラダメスは答へない、そうして生埋めの刑を宣告される。

アムネリスは彼等にラダメスの減刑を乞ふた、併し彼等は之を拒む、アムネリスは大に僧達を呪ふ。

第二場は處刑場である、獄衣のラダメスが窖の薄暗い處に立つ、彼の頭上には大きな岩がある、之が落下すると窖がふさがるやうな仕掛になつて居る、彼がふと横を見ると窖の中にアイーダが居る、彼は仰天する、彼女は彼と運命を共にするために密に來たのである、ラダメスは彼女を去らせようとするが彼女は去ることを肯じない、彼の處刑は

行はれた、アムネリスは喪服を着け來つて二人の來世の幸福を祈る。

一一一、さまよへる和蘭人(三幕)

リヒアルト・ヴァークナー作

登場人物

ダラント(ノルウエーの船長)……………バ
 センタ(その娘)……………ソプラノ
 エリック(獵夫)……………テノール
 マリー(センタの乳母)……………コントラルト
 ダラントの舵手……………テノール
 和蘭人……………パリトーン

其他兵士、女等、獵人等
 場所……………ノルウエーの海岸

此のオペラは作詞も作曲も共にヴァークナーの手によつて出来上つたものである、初演は一八四三年一月二日にドレスデンのローヤルオペラで行はれた。

第一幕はノルウェーの海岸で、其處にはダラントの船が海岸近く投錨して居る、近傍には多くの岩が散在して居る水夫等は帆を下すと、ダラントは海岸に近附いて来る、而して崖の上に登る、彼は自分が故郷から七哩の地點にあることを知つた、併し風の方向が變るまで此處に待たねばならないのである、彼は夫れまで水夫等に下へ降りて休息せよと命じる、而して後には舵手のみが見張りをして居る、彼は疲

勞の爲めにうつかり眠つてしまはない様に舟唄を歌うて居る、併し彼は知らぬ間にうつとりと眠つて「さまよへる和蘭人」の船の來たことを見逃した、「さまよへる和蘭人は今や血のやうな赤さの帆と黒いマストをつけた船でやつて來る、此船は時期を定めて此處へ來るのである、幽靈のやうな水夫は帆を下して錆ついた碇を投げる、此船の長なる、さまよへる和蘭人は此怪しき船の甲板に立つて陸を見ながら宣叙調を歌ふ。

ダラントは甲板へ出て來て目の前に奇怪な船の碇泊して居るのに驚く、彼は舵手を起して二人は行つて此の和蘭人

と語る、此のオランダ人の名はファンダーデッケンと云ふので悪魔のために一生涯海を航海するやうに運命づけられて居るのである、併し七年に一度上陸を許されて、彼が女の愛を得るならば悪魔の呪は消滅するといふのである、彼はダラントに彼の家に一泊さして呉れるやうに乞ひ、その謝禮として寶石を贈らうと云ふ、ダラントは彼をつれて故郷へ歸つた。

オランダ人はダラントが娘を持つて居ることを聞いて結婚を申込む、單純なダラントは此の様に金持ちに見える人より結婚を申込まれると云ふ名譽に眩惑されて、若しも娘

が承知するならばと云ふ。

第二幕はダラントの家の一室である、多くの若い娘達が急がしげに紡車を廻して居る、そうして楽しい紡き唄を歌ふ、併しダラントの娘ゼンタは他のことを考へて居る、彼女の目前には壁間にさまよへる和蘭人の想像畫が掛つて居る、不幸なる和蘭人の傳説は彼女に色々想像を起さしめて、其れが今現實の物の如くに思はれる、他の娘達は笑つて其様に和蘭人に同情をよせたら、ゼンタの愛人なるエリックが嫉妬を起すだらうと揄擲ふ。

然るに彼女は自分の限りない愛で彼を助けよう云ふ、

其處へエリックは和蘭人の報知を以て入つて來た、皆は海岸へ走つて行く、エリックは残つてゼンタに近づき愛を得ようとする、彼女は聞かうとしない、エリックは去る。

突然に戸が開いて父と和蘭人が入つて來た、彼女は今や現實のオランダ人を見て驚く、彼等の間には長い沈黙が続く、和蘭人は輝かしいゼンタの顔をみつめながら近附く、ダラントは娘とオランダ人どを残して去る、和蘭人はゼンタの中に彼が屢々夢に見た天使即ち恐ろしい呪を取り去つて呉れる天使を認める、和蘭人は彼女に父の良人の選擇法に賛成するか如何にと聞く、彼女は賛成すると云ふ、而し

て長い愛の二重唱が歌はれる、ダラントが入つて來て二人の理解を見て殊の外喜んだ、そうして和蘭人を諾威の船の安着の祝祭に招待せうと告げる。

第三幕はダラントの港である、港には和蘭人の船も碇泊して居る、ダラントの船からは和蘭人の船の陰氣なのに引きかへて燈がついて賑かな聲がする、娘等は食物の籠を持つて出て來た、そうして水夫等は娘達を喜んで迎へる、娘達は水夫等に供給して次に和蘭人の船に近附いて水夫を呼ぶ、併し只だ沈黙があるばかりである、娘達は仕方なく夫れを諾威の水夫に残して歸つて行く、其時突然和蘭人の船

の周圍に波が起り氣味の悪い焰が上つた、水夫等が現はれて氣味悪い合唱を始めた、諾威の水夫等は驚いて恐怖を感じる、すると又急に沈黙する、人々は又恐れる、其處へゼンタとエリツクとが來て二重唱を歌ふ、エリツクはゼンタの愛が又自分にかへつて來るやうに希ふのである、突然和蘭人が出て來て此有様を見てゼンタが自分を欺いたものと思ひ、すつかり失望して船に出帆の用意を命ずる、而してゼンタの言譯けを聞かぬ、彼は人々に自分の素性を打明けて永久に呪はれて海をさまよはなければならぬと云ふ、彼が船に飛びのると船は其儘陸を離れた、水夫等は又氣味

わるい合唱をはじめ、ゼンタは夢中になつて斷崖の上にかけて上る、そうして最後に自分の愛の眞實を歌つて海に飛び込む、其時不思議にも其和蘭人の船は沈んでしまつた、人々はあとにゼンタと和蘭人とが抱き合ひながら難破船から天に昇つて行くのをかすかに認めた。

呪は去つた、眞實の愛は遂に勝利を得た。

一三二、タンホイザー（三幕）

リヒアルド・ヴァークナー作

登場人物

ヘルマン（チューリングアの領主）……………	バス
タンホイザー（ミンネンゲル）……………	テノール
ヴォルフラム・フォン・エツシエンバハ（同上）……………	バリトン
ヴォルタ・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ（同上）……………	テノール
ビテロハフ（同上）……………	バス
ハインリッヒ・デア・シュライバー（同上）……………	テノール
ラインマ・フォン・ツウエーター（同上）……………	バス

エリザベート(ヘルマンの姪)……………ソ
グ エ ヌ ……………ソ
若 き 牧 人……………ソ
四人の貴族の小姓……………ソ
ソプラノミアルト
其他巡禮者、ニムフ、サイレン、騎士、貴婦人等
所……………アイセナツハの近傍
場
代……………十三世紀の初期

第一幕第一場はヴェヌスの丘でニムフ、サイレン、ネイア
ツド等が歌ひさしめいて居る、ヴェヌスは横になつて拒絶
的態度で居て、タンホイザーを見つめて居る、此の女神
は何故にタンホイザーが陰鬱な顔をして居るかと問ふ、タ
ンホイザーは自分が歡樂に飽き飽きしたから、又世の中が

見たくなつたといふ、ヴェヌスは之を聞いて彼に俗世の苦
痛を語り其のやうなものは捨て、愛を讃美せよと云ふ、タ
ンホイザーは立つてヴェヌスの讃歌を歌ふ、併し彼は之を
歌ふのが苦痛なのである、彼は豎琴を投げ出して唯だ愛の
みで心を満足せしむることが出来ないと嘆く、そうして一
層のこと苦痛の世界に歸りたいと云ふ、ヴェヌスは怒つて
勝手にせよと云ふ、そうして彼が今こそ俗世が見たいと云
ふが、やかで又其苦痛に耐へかねて、復此世界に来るに違
いないと豫言する、そうしてタンホイザーを残して去る。
第二場は谷である、タンホイザーはワルドブルヒに近き

美しい谷に出て来た、美しい景色である、牧人の笛が聞え
高原の方からは羊の鈴の音がする、巡禮者の一隊が合唱し
ながら過ぎて行く、小さい牧人は彼等が羅馬への旅に幸あ
れと祈つた、タンホイザーは崇高の感に打たれて居る。

其處へ領主と歌人が入つて来るが其處に一人の騎士の跪
づいて居るのを見つけ、近寄つて見ればタンホイザーであ
る、彼等は驚く、そうして色々と質問する、併し其間を彼
は避けようとする、彼等は皆一緒に歸ることをすゝめて、
エリザベートがタンホイザーを慕つて居る事をも告げる。
タンホイザーは彼等と一緒に歸ることゝした、而して彼

等にすゝめられて来るべき歌の會ではエリザベートの手に
ある賞を争ふことを約する。

第二幕はワルドブルヒのヘルマン邸の廣間である、エリ
ザベートが入つて来る、彼女はタンホイザーの歸つて来た
のを非常に喜んで居る、其處へタンホイザーが入つて来て
エリザベートの足に跪て語る。

やがて領主が入り來つてタンホイザーを歌の競技會に歡
迎せうと云ふ、騎士と貴婦人連が氣高い行進曲につれて入
つて来る、一同着座の後領主が立つて挨拶をする、彼は歌
の主題は「愛」によつたものであることを云ふ、而してヴ

オルフラムに最初に歌はしめる、ヴォルフラムは持つて居たバブをとつて至高の愛を歌ふ、タンホイザーは此れを聞いてヴェヌスのことを思ひ出し夢中になつて、ヴェヌスの讃歌を歌ひ初める、他の騎士達は此の會の神聖を瀆すものだと怒り、劔を抜いてタンホイザーに迫る、ところをエリザベートによつて助けられる。

ヘルマンはタンホイザーに巡禮隊に加つて羅馬へ修行に行くと云ふ、其時遠くで巡禮の合唱が聞へた、タンホイザーは之を聞いて其巡禮隊の方に走つて行く。

第三幕はワルトブルヒの下にある谷で、一方には神殿が

ある、エリザベートは跪いて神殿で祈つて居る、ウォルフラムがやつて来る、そうして彼女を見てその變りはてた姿に同情して痛はしく思ふ、其時巡禮の歌が遠くで聞へる、エリザベートは立ち上つて熱心に其群を見つめて居る、併し其中にはタンホイザーの姿が見へない、哀れな女は又額づいて、マリアに祈を捧げる、彼女は祈りの歌を歌つて彼は最早歸つて來ないだらうと云つて倒れる、彼女は斯様にして長い間恍惚として居る、其時ふとウォルフラムの近附いたことを知つて手まねで彼にかまつてくれるなど云ふ、併しウォルフラムはエリザベートに守らせて呉れと乞ふ、

エリザベートは又手まねで夫を感謝するが近附いて來て呉れるなど云つてその儘去つた、ウォルフラムは悲しげに彼女を見送つて居たが、やがて丘の麓に座して豎琴に合はして「宵の星」の唄を歌ふ、タンホイザーが現はれる、彼は非常に疲れて居て破れた巡禮の衣を着て、辛うじて杖にすがつて居る、ウォルフラムは彼を迎へる、タンホイザーは己れの罪が未だ許されて居ないこと、法皇の持てる杖が萌ぐむまで罪は許されざるとの宣告をうけたことを云ひ、一層又ヴェヌスの下に行かうと決心したことをつげる、之を聞いたヴォルフラムは驚いて之を止める、タンホイザーは

拒絶する、ヴォルフラムはエリザベートの名を云ひ、その哀の狀を語る、タンホイザーは急に目ざめて後悔し其處へ跪く。

すると遠くの方からエリザベートの死体を運ぶ歌人等の姿が見える、エリザベートは遂に昇天したのである、行列が近づいた時に巡禮の一隊も近づいてタンホイザーの罪が許された事を語り其證據として緑の葉を生じた法皇の杖を見せる、ウォルフラムに支へられて居たタンホイザーはエリザベートの神々しい顔を見て居たが彼も其儘そこに倒れて逝つた、人々は彼等二人の冥福を祈り、且つ神に感謝す

一四、ローエングリン (三幕)

ヴァークナー作

登場人物

ローエングリン(聖杯の騎士).....	テノール
ハインリッヒ(獨逸の王).....	バス
フリードリッヒ・フォン	バリトン
テルラムンド(アラバント伯爵)	ソプラノ
エルザ	メゾ・ソプラノ
オルトルート(フリードリッヒの妻).....	メゾ・ソプラノ
所.....	アントワーブ
代.....	十世紀の前半頃

之も亦ヴァークナーによつて臺詞も樂曲も作られて居るもので、初演はリストの手によつて一八五〇年八月二十八日ワイマルで行はれた、このオペラは場所もアントワープの近くで、獨乙國王ハインリッヒが葡萄牙人の侵入を防ぐためにブラバントの地へ軍隊を募りに行くと恰度此土地に大騒亂が起つて居た、此領主のブラバントは數ヶ月前に死んだのであるが、其死する前に幼少なる嗣子のゴットフリードが忽然として姿を消してしまつた、フリードリッヒ・テルラムンドと云ふ伯爵は其ブラバントの領主たらんとし、テ悪計をめぐらして、ゴッドフリードの姉エルザが自ら相

續せんが爲めに弟を密に殺したものと宣傳した。

第一幕は之れからの出来ごとを取扱つたものである。

場面はアントワープに近きシエルト河の堤である、ハインリッヒ王はブラバントに来ると此地は殆んど無政府の状態にある、王はサキソニーの伯爵や貴族やブラバントの貴族等を「裁斷の櫛の木」の下に呼び集めた、そしてテルラムンドに立つて此國の有様を説明させる事とした、テルラムンドは出て来る、而してエルザを殺害者だと主張した、王はエルザを連れて來いと命ずる、彼女がおづおづと下を向ひて入つて來て、夢の中に彼女の辯護人として來た立派な

騎士の夢物語をはじめ、王は其時代の風習として劔を抜いて地面に刺して、テルラムンドとエルザに決闘に依つて神の裁斷をうける意かあるかと問ふ、夢に見た騎士の來ることを信じて居るエルザは承諾する、喇叭手は鬨の喇叭を吹き立てた、初めは誰も出て來ない、二度目の喇叭が鳴つて一人の騎士が輝かしい鎧に身を堅め、白鳥に引かれた小舟に乗つてやつて來る、而して今自分は無實の罪を着たエルザを救ひに來たのであると宣言する、王は皆に戦ふ用意をさせる、騎士はエルザに今自分が若し勝つたならば其妻となることを承知させる、併し如何なることがあつても何

處から來たか、又名は何と云ふかを聞いてはならないと宣言する。

やがて二人は戦ふがテルラムンドは直ちに負かされ、而してエルザは無罪と決定せられた、人々は之を祝福する。

第二幕は宮殿の場面である、アンワープの宮殿の内部で夜である、テルラムンドと妻のオルトルードは目立たぬ着物を着て、宮殿の階段に居る、彼等は互に相手を非難し合つて居る、二人は終に復讐を語り合ふ、其時エルザが宮殿のヴァルコニーの上に現はれる、オルトルードは夫を去らせてエルザに向つて自分等二人の不幸を口説く、エルザは同

情して二人の罪を許すことを自分の騎士に頼んでやると云ふ、エルザは入る、テルラムンドは又その悪計に取りかゝる。

夜明である、騎士の邸では王が喇叭手に召集の合圖を吹かせる、エルザは盛装して居る、結婚の式である、エルザが會堂に入る時オルトルートは其前に立ち自分が先きに入る、そうしてエルザに騎士に對する不安を感じさせるやうな事を云ふ、王をはじめ騎士も出て来る、騎士はオルトルートがエルザと話すのを見て、オルトルートを去らしめ、エルザと共に會堂に入らうとする、そこへ又テルラムンド

が出て来て、又エルザの心を痛めしめるやうなことを云つて去る。

第三幕は宮殿の花嫁の室である、高貴の人々が引つゞいて入つて来る、人々は二人の幸福を歌ふ、そうしてやがて二人を残して去つてしまふ、騎士は彼れの美しい花嫁と共に長い二重唱を歌ふ、エルザはオルトルートの魔力によつて騎士に對する疑念が漸次深くなつて行つて遂に自制力を失ひ、騎士に例の二つ問を發してしまふ、此時テルラムントが此部屋に忍び込んで来る、其れを發見したエルザは騎士に劍を渡す、騎士は一撃の下にテルラムントを殺して、

人々を呼び此の屍体を王の前へ持つて行くことを命じて自分は王の前で自分の素性を明かすと云ふ。

場面が變るとシエルト河畔である、王を始め總ての貴族騎士が此處へ集つて来る、やがて騎士が入つて来る、エルザも悄然と入つて来る、人々はテルラムントの屍体を見て驚く、騎士は靜かに其理由を説明する、そうしてエルザが約束を破つたが故に二人は又離れねばならない事を云つて自分の素性を物語り初める。

彼はモンサルヴァートの國、聖杯グレースの事を述べ、自分はその國のバルシファルの息子ローエングリンであつて

その聖杯を守護する騎士の一人であると云ふ。

エルザは之を聞いて氣が遠くなつて倒れてしまふ、ローエングリンは彼女を助け支へながら自分の素性が知れた以上は、又此世を去つてモンサルヴァートに還らねばならぬと告げる。

此の時白鳥が小舟を引いて出て来る、其時オルトルトが出て来て自分の勝利を誇る、之を見たローエングリンは跪いて黙禱すると、神聖なるグレースのシンボルなる鳩が下りて来る、ローエングリンは白鳥に近づいて其首にかゝつて居る鎖を去ると、白鳥は消えて、死んだと思つて居た

ゴットフリートが忽然と現はれた、オルトルートは之を見て失望其極に達して死んでしまふ、姉弟相擁して喜んで居る間にローエンダリンは船に乗つた、船は鳩に引かれて遠くに駛け去つた、ローエンダリンが見へなくなると、エルザは悲しみのあまり倒れる。

一五、トリスタンとイゾルデ (三幕)

ヴァークナー作

登場人物

トリスタン(マルケ王の甥)……テノール
マルケ王……バス
イゾルデ(アイルランドの王女)……ソプラノ
クルヴェナル(トリスタンの忠僕)……バリトン
メロト(マルケ王の臣)……テノール
プランゲーネ(イゾルデの友で侍女)……ソラブノ

其他牧人、舵手、水夫、兵士、騎士等

場 所……アイルランドを中心として其の附近

第一幕はトリスタンとイゾルデをコーンウォールに乗せて行く船の甲板の場面である、彼女は今嫌々ながらコーンウォールのマルケ王の妃となる爲にトリスタンを守られて行く所である、イゾルデは煩悶して居る、侍女ブランゲネは其理由を尋ねるが只嘆くのみである、イゾルデはブランゲネを通じてトリスタンを呼ぶ、併しトリスタンは自分は自分の役目を果すのみであると云つて斷る、イゾルデはトリスタンを恨む、而してブランゲネにトリスタンの關係を物語る。

數年前彼女は曾て愛蘭で戦争に負傷したトリスタンを發

見した、併しトリスタンは此時彼女の愛人なるトロルトと云ふ若い騎士を殺して居たので彼女は復讐しようと思へば出来たのである、併し彼女は其仇なるトリスタンを看護した、彼女の親切に感動してトリスタンは戀に落ちた、然し彼等は後になつて別れねばなくなつた、然るに此度偶然にもマルケ王の妃として彼女を迎へに行くやうに命せられたのである。

トリスタンが今イゾルデの招待を拒絶したので彼女は非常に怒つた、そうしてトリスタンを毒酒を飲ませて自分をそれを飲んで死なうと決心する、其時トリスタンが入つて

来る、彼女は彼に殺さうと思へば彼の負傷した時でも出来たのにと云ふ、彼は彼女に自分を殺してもかまはないと云つて自分の劔をイゾルデに與へる、然し彼女はブランゲエネに毒酒の用意をさせる、侍女は密に其毒酒を愛を誘ふ酒にかへた、イゾルデはトリスタンに平和の酒をすゝめるといつて、トリスタンが半ば飲むとき之を取つて自分も飲んだ、二人は毒酒と思ひきや、飲むだ酒の力で二人は相抱してコーンウォールにつくのも忘れた。

第二幕は妃としてのイゾルデの部室の外側の禁園である王は獵に行つて居るのである、併しブランゲエネは夫れは

單に策略であること、そうして王の臣メロトがトリスタンとイゾルデの間を密偵して居ることをも感じて居る、ブランゲエネは自分が毒酒と愛の酒とを取りかへたことを白状する、愛に酔つたイゾルデは何も運命だと云ふ、そうしてブランゲエネが注意するにも拘らず炬を消してトリスタンに来るやうに合圖をする、トリスタンが現はれて長い愛の場面が続く、その時突然に王が歸つて来て二人を驚す、王は苦々しくトリスタンに近づく、メロトは劔を抜くトリスタンも劔を抜く、併し彼は故意に負けて傷を受けて倒れる、之を見てイゾルデも氣絶する。

第三幕はブルタニーなるトリスタンの居城である、彼は半死の状態で忠僕クルヴェナルに縋つて来る、クルヴェナルは彼を横はせる、丘の上には牧人が笛を吹いて居る、牧人はクルヴェナルにトリスタンの傷は如何かと聞く、クルヴェナルは牧人に海上に若しもイゾルデの船が現はれたら笛で合圖をしてくれと云ふ、やがてトリスタンは目を覺まして、而して自分は今何處に居るかと尋ねる、又イゾルデの夢を見たと言ふ、クルヴェナルはイゾルデに来るやうに云うてやつたと語る、トリスタンは喜ぶ、やがて合圖の笛が聞える、イゾルデの船が来た、クルヴェナルはイゾルデ

を迎へに海岸に行く、トリスタンは前にイゾルデに會つたと同じ姿で會うと縋帶を取つてしまふ、其時イゾルデが来た、トリスタンは其腕に抱かれたまゝ死んでしまふ、イゾルデと踵をついでマルケ王が来る、クルヴェナルは彼等が攻めに來たと思ひ、メロトを殺し自分も負傷して死んだ、マルケ王は死んだトリスタンと氣絶して居るイゾルデを見て非常に之を憐む、王は二人を許して結婚せしめようとして來たのである、イゾルデは息を吹きかへすがトリスタンが死んだのに氣がついて名高い「愛の死」を歌つて死んでしまふ、マルケ王は二人の冥福を祈る。

一六、ニユールンベルグの名歌手(三幕)

ヴァークナー作

登場人物

ハンス・ザックス(靴 屋)……バ ス	ホグナ(金細工 人)……バ ス	ワルター・フォン・シトルチング(若い騎士)……テ ノール	ダグイット(ザックスの奉公人)……テ ノール	エグア(ホグナーの娘)……ソ ブラノ	マグダレーナ(エグアの乳母)……メ ゾップラノ	ベックメッサー(町の 役人)……バ ス	コトキ(パン 屋)……バ ス
--------------------------	-----------------------	---------------------------------	---------------------------	-----------------------	----------------------------	---------------------------	----------------------

其他詩人、市民、旅人、娘等

場

所……………ニュールンベルグ
代……………十六世紀の中頃

第一幕はニュールンベルグなる聖カテリーネ教會である。其處では金持のボクナーの娘エヴァとフランコニアから來て居る若い騎士ワルターが會て愛を語つて居る、彼は彼女からその父が明日の歌の競技會で優勝したものと結婚するやうに約束されて居るのであると話される、ワルターは之を聞いて其競技會即ち聖ヨハンネスの祭日の歌の競技會に出て、自分も人々と争ふと決心する、此のフランコニアの騎士なるワルターは其の儘此地に留まり明日の決戦を俟つ。

—(160)—

ワルターの他に今一人エヴァを望むて居るものでベックメツサーと云ふ者が居る、之は町の役人である、決戦の前には豫選がある、ベックメツサーが採點者になるがワルターの歌を苛酷な規則によつて無理に悪い點を與へる、ワルターの味方なるハンス・ザックスはワルターの優れた才能を認めて、大いにベックメツサーに反對する、而して人々は混亂の中に退場する。

—(161)—

第二幕は街の道路である、横にザックスの家があり、反對側のボクナーの家がある、ザックスの徒弟等は明日の夜の會を楽しんで待つて居る、而して歌ひさゞめきダヴィツ

ドにエヴァの乳母、ダヴィットの愛人なるマグダレーナの事を云つて揄揶ふ、ザックスは餘り八釜敷いので彼等を他所へ追ひやつてしまふ、そうしてダヴィットを床につきかじめ、一人でワルターの歌の事計りを考へる、ワルターの歌つた歌の美しさが彼の心を捕へて居るのである、エヴァはマグダレーナからワルターの落選して資格を失うた事を聞いた、彼女は悲觀して興奮のあまりワルターと二人で逃亡せうと約束までしてしまふ、併し二人はベックメツサーが居るので妨げられて逃げ出す事が出来ない、彼等は仕方なく隠れて居る、ベックメツサーはエヴァの窓の下に来て半

ばはエヴァに聞かすために、半ば明日の決戦の練習の爲めに聲高らかに歌ふ、ザックスはリュートの音を聞いて窓から覗く、そうしてベックメツサーが歌ひ始め様とするとザックスは大きな聲で民謡を歌つて妨げる、ベックメツサーは非常に困る、そうしてザックスは酒に酔つて居るのに違ひないと云つてザックスと長い口論の後、ベックメツサーは終に歌ひ始める、併しザックスがベックメツサーが間違つたり、悪いアクセントをする度に靴を叩いて揄揶ふので甚だ歩調を亂されて悲觀する。

ベックメツサーの歌を聞いて近所の人々は窓から顔を出

して斯様に夜おそく迄歌うのは誰かと問ふ、マグダレーナはエヴァの窓を開いてベックメツサーに彼方に行けと合圖する、ダヴィットは夫れを見て彼女がベックメツサーに合圖をして居るものであると思ひ誤つて嫉妬心を起し、ベックメツサーを散々になじりつける、人々は其物音に驚いて外へ飛び出して来る、其機會にワルターはエヴァを連れて逃げ去らうとする、ザックスは之を見て引き止め、エヴァはボグナーに渡しワルターを自分の家に連れて来る、ベックメツサーはすつかり面目玉を潰してこそ、こそと自分の家に逃げ去る。

第三幕はザックスの仕事場である、一夜をザックスの家で過ごしたワルターが入つて来る、而してザックスに昨晚夢の中に自分の頭の中にふと浮んだ驚くべき旋律のことを彼に語る、而して歌ふ、二人は夫れを紙に書きとつてテールのの上に置く、ワルターは部屋を出て行く、入れ代りにベックメツサーが入つて来て其のワルターの歌を見てザックスに質問する、ザックスは自分のものであるといふ、而して何か計畫をして居るザックスはこれをベックメツサーに提供せうと云ふ、ベックメツサーは喜んで其の歌を練習するために出て行く、エヴァは足にもつとよく合つた靴が

欲しいと云つて入つて来る、彼女は夫れを口實としてワルターに會ひに来たのである、其處へワルターが現はれるエヴァはザックスの親切に絶大なる感謝をして居る、マгдаレーナとダヴィットに入つて来るやうに云ふ、而して二人にワルターが今一つの名歌手の歌を作つた事を語り、ダヴィットを徒弟から一人前の職人にしてやる、其處で五人の美しい五重唱が歌はれ、ワルターの成功を皆んなで祈る。

第二場はベックニッツ河畔である、其岸の廣い野原で競技が開かれるのである、附近は今日の競技の爲めに頗る華やかに飾り立てられて、美しい着物を着飾つた人々が右往

左往する、總での人が集つた時にザックスは立ち上つて競技開催の辭を述べる、ベックメツサーはザックスから貰つたワルターの歌を覺へようと努めて居るが如何にしてもうまくいかないで苛ら々々して居る、ベックメツサーは歌手の壇上に立つて歌うが間違ばかりして居るので人々は笑ふ。

ベックメツサーは憤慨し彼を失敗させようとしたザックスの策略を呪ひ、歌を投げつけて、人々に之はザックスが作つたものであると叫んで去つてしまふ、ザックスは靜かに其れを拾ひ上げて群衆に對して之は自分の作ではない、

若しも之を正しく歌へる人があるならば其人こそこの歌の作者であるに違ひない、而して其人こそ名歌手でなければならぬと云ふ、ワルターが出て立派に之れを歌ふ、人々は全く其の美しさに酔はされた、而して彼を名歌手の一人に列することを賛成する、恍惚として聞いて居た、エヴァは演壇に近づき、階段の所に跪いて居るワルターの頭に花環を載せて、彼女の父の所へ連れて来る、而して二人は父の前に跪く、ポクナーは彼等の頭に手を置いた、今度はエヴァがワルターの頭上の花環をとりザックスの頭上に置く、ザックスは金の鎖を以てワルターを飾る、そうしてワルター

ーとエヴァを抱いた、ポクナーは感動して跪く、歌人等は手を舉げてザックスを彼等の歌の長にする事に賛成する、群衆は熱狂して喜ぶ中に終る。

一七、ラインの黄金(一幕)

登場人物

ヴォータン……(神)……パットン
 ドンナー……(同)……パ
 フロー……(同)……テノール
 ローゲ……(同)……テノール
 ファゾルト……(巨人)……バス
 ファナー……(巨人)……バス
 フリッカ……(女神)……ソプラノ
 フレイア……(女神)……ソプラノ
 エルダ……(女神)……コントラルト
 ヴォーグリンデ……(ラインのニムフ)……ソプラノ

ゲエルグンテ……(同)……ソブラノ
フロスヒルデ……(同)……ゴントラルト
アルベリツヒ……(ニールングの小人)……パリト
ン
メ……(同)……テノール
場 所……ラインの河底・ウルハッラ・ニールング

第一場はライン河床である、河のニムフなる三人の娘が泳ぎ廻つて居る、彼等は河底の岩に收められてある寶の黄金を守護して居るのである、其處へニールングの小人アルベリツヒが、こつそり、現はれるがニムフ達の美しい歌や姿に見とれて居る、やがて娘達は其れを見つけた、而してその醜い姿を嘲笑する、アルベリツヒは怒つて彼女等を追

ひかけるが、ごうしても捕へられない其中に朝となつた。太陽の光が河底まで達して来る、かの黄金は其光をうけて燦爛と光る、アルベリツヒは之を見つけて欲しくなつて盗み出さうと思ふ、ラインのニムフ達は其のやうなアルベリツヒの悪計を露知す、この黄金で作つた指環を有つことの出来る人は、世界を支配する事が出来る、併しその目的を達する爲には愛を放棄せねばならぬと語り合ふ、そうしてアルベリツヒを嘲笑する、愛などを入用と思つて居ないアルベリツヒは之を聞いて岩に近寄り巧みに黄金を持つて去る、あとには光明を奪はれたニムフの泣聲が聞へる。

第二場はヴァルハツラの城の見える山の頂きである、其處には神々は住んで居る、之はヴォータンの爲めに巨人等が建てたもので、妻と其處に眠つて居たヴォータンは目が覺めると、目前にかゝる壯麗な城が立つて居るので彼等は大に喜ぶ、併し妻のフリツカは此の城の爲めに報酬として巨人へ約束した愛の女神でこの城内のものに永遠の生命を與へる金の果實のなる木の培養者たるフレリアの運命を與へてあるから、巨人等が其約束の履行を求めに来ることを氣にして居る、間もなくフレリアは巨人に迫られて来た、そうして巨人等はヴォータンに約束の履行を強求する、ヴ

オータンは大に困つて火と智の神なるローゲを呼びフレリアの代りになるものを探して来いと命する、けれども、其れを求めに行つて歸つて来たローゲは女の愛に代るべきものはないといふ、只あのアルベリツヒの盗んで行つた黄金は驚くべき力を持つて居るものであることを云ふ、巨人等は若しヴォータンが其黄金をアルベリツヒから奪ひ取つたならば、夫れとフレリアと交換せうと云つてフレリアを連れて去る、ヴォータンは仕方なくてニールンゲンの黄金をさがしに出かける、ローゲも随ひ行く。

第三場はアルベリツヒの洞穴である、黄金の指環に作り

かへたアルベリツヒは前よりも更に剛慢になつてミメなどを苛めつけて居る、彼は又魔法の呪を持つて居つて、自由に其身体を變化させる、ヴォータンは計畫漸く効を奏して、アルベリツヒを捕へて彼を縄で括つた、そうして神々の國へさして歸る。

第四場は第二場と同じ所である、ヴォータンとローゲが入つて来る、アルベリツヒを引出して、自由にしてやるから所有物を出せと云ふ、アルベリツヒはニールングの者共を呼んで持て來させる、ヴォータンは更に指環を要求する、アルベリツヒは仕方なく其れに従ふ、併し彼はこの指

環が再び自分の手に歸るまで他の所有者に悲惨と、死を齎らす様にこの呪を指環にかける、ヴォータンは呪には氣を止めず、其指環をとつて美しさを愛でる、巨人等は又フレイアを連れて出て来る、フレイアをすつかり隠してしまふことの出来るだけ金を積むことを要求する、金は積まれたが只指環の入るだけの餘地が残つて居る、ヴォータンはこの指環を與へることを好まぬ、巨人は又フレイアを連れて去らうとする、其時智の神エルダが現はれて、ヴォータンに指環を捨てるやうに忠告する、遂にヴォータンは其指環をも與へた、併しこの指環を得んが爲めに二人の巨人は戦う

てファゾルトはファフナーに殺される、呪は已に始まつたのである、ファフナーは指環や寶物を持つて去る。

雷神ドンナーは嵐を起して城への橋を作るために魔法の虹を作る、其時ヴォータンはヴァルハラに對して有名な祈りの唄を歌ふ、今やヴァルハラは夕日に輝いて壯嚴を極めて居る、神々は虹の橋を渡る、其時ラインのニムフ達のすゝり泣く聲がかすかに聞へる、彼女達はあの失はれた黄金を求めて泣くのである。

一八、ヴルキューレ(戦姫)(三幕)

ヴァークナー作

登場人物

ジークムンド	テノール
ファンディング	バス
ヴォータン	バリトン
ジークリント	ソプラノ
ブルンヒルデ	ソプラノ
フリック	ソプラノ
其他	

序劇「ラインの黄金」でエルダの助言によつて指環をも見捨て、英雄の創造をする決心をしたヴォータンは其後地上に下りて或る女神を妻とした、彼等の間には九人の娘(戦姫)が出来た、其れより地方に姿を變へて現はれ更にジークムンドとジークリンドといふ男女の子供を作つた、併しジークリンドはフンディングといふものに無理に捕へられて結婚を餘議なくせられ、ジークムンドと別れる。

第一幕は森林中のフンディングの小屋であつて中に大きな木が屋根を通して生へて居る、ジークムンドがつかれ切つて入つて来て爐の側に倒れる、ジークリンドは此の若者

の元氣を回復させる、併しこの兩人はすぐに戀におちる、其處へフンディングが歸つて来る、彼はこの見知らぬ男の事について妻に尋ねる、フンディングはジークムンドの中に自分に對して致命的なあるものゝあることを認めて今日は家に止まつて休むがよい、明日になつたならば決闘をせねばならぬとジークムンドに云つて自分の部屋に去る、彼女は酒の中へよく眠る薬を入れて飲まず、ジークムンドは明日戦はねばならぬ事を考へて心配して居る、然し彼の心にヴォータンが云つた言葉、即ち彼が最も必要を感じたときに發見するであらうと云つた劍のことを思ひ出す、ふと

其側の木を見ると一つの劔がさゝれて居る、女は自分の結婚の日に突然あらはれた男が差し込んで之を抜き得るものが来て之を抜きとるであらうと告げて去つたと語る、ジークムンドは立つて怪腕を振つて之を抜き取り、二人は喜び抱き合ひ、やがてフンディングクの家を逃げて行く。

第二幕は峨々たる山道である、ヴォータンとその愛する娘ブルユンヒルデがあらはれる、彼は娘に今フンディングに追はれつゝあるジークムンドを助けに行くやうに命令する、併しブルユンヒルデの去つた後で、すぐにフリツカが出て来て、ジークムンド兄妹の破倫な行爲を責めてジーク

ムンドを死に導かなければならぬ事を忠告する、ヴォータンは仕方なくブルユンヒルデを呼びかへして救助を中止させる、ヴォータンは悲んで居る、ブルユンヒルデはかの兄妹に同情し父の命令に背いて二人を助けようと思ふ、ジークムンドの方では益々フンディングに追ひかけられる、而して遂に岩の上で戦ふ、ブルユンヒルデはジークムンドに加勢するが遂にヴォータンの意志によつてジークムンドは殺され、又フンディングも殺される、ブルユンヒルデは父の怒りを恐れてジークムンドの刀の折れたのを拾ひジークリンドを彼女の馬に乗せて二人で逃げ去る。

第三幕は岩山の頂上である、ブルユンヒルデはジークリンデを抱いたまゝ、天駛ける奔馬に乗つて走る、ヴァルキューレの娘達はブルユンヒルデが窮して彼等の所へ避難して来たのを知るが、ヴォータンの怒りを恐れて隠す事を躊躇する、併し遂にヴァルキューレ等は相談の後ジークリンデを大蛇にかへて指環と寶物を守らせる、ブルユンヒルデは劍の折れをジークリンデに與へて彼女が勇士ジークフリードの母となることを告げる。

ヴォータンはブルユンヒルデの神性を奪うて山頂に眠らせ、第一番に來た人間によつて目を醒まさせられるまで、

眠らなければならぬことを宣告する、ブルユンヒルデは劍のことをヴォータンに話す、而してヴォータンの欲して居る英雄の近い中に来ることを語つて、人間の中で最も強い者のみが通れるやうな火の壁で眠つて居る自分を圍んで貰いたいと云ふ、ヴォータンは其願を入れてやる、ヴォータンは立ち去る、やがて不思議の火が燃へ上つてブルユンヒルデを取り圍む。

一九ジークフリード (三幕)

ヴァークナー作

登場人物

ジークフリード	テノール
ミメ	テノール
さまよへる人(ヴォーダン)	バリトン
アルベリッヒ	バリトン
ファフナー	バス
エルダ	コントラルト
ブルンヒルデ	ソプラノ

其他

ジークリンデはブルンヒルデのお陰でヴォータンの怒から逃れることを得た、彼女はやがてジークフリードといふ子を産んで死ぬ、ミメは此子がファフナーを殺して指環を奪ひかへすべく運命づけられて居るのを知つて、之を引きとつて養育した、其子はやがて勇ましい青年となつた。

第一幕は森林中である、一方には洞穴がある、ミメは森の鐵床にてジークフリードが大蛇を殺す時に用ふべき劍を鍛へて居る、けれども容易には出來ない、ジークフリードには一頭の猪を追つて來たがミメが其を恐れるので森へ逃かしてやる、彼は劍を見つけて取り上げ鐵床の上で試して見

るが直ぐに折れてしまふ、彼はミメに自分の小兒時代のことを質問する、ミメは仕方なく母のことやフンディングとの戦に此の刀を折つた父のことを語る、ジークフリードは出來るだけ早く劍を直すやうにと要求して又森の中へ入つて仕舞う。

ヴォータンが入つて來る、而してミメの問に對して自分は漂浪者であるといひ、且つ恐れを知らぬ勇士のみが其劍を鍛へることが出來るのであるといふ、ヴォータンが去つてからジークフリードが歸つて來る、今やそろそろ此の青年に恐れを抱き初めたミメは如何かしてジークフリードに

恐れと云ふものを抱かせようとおもつて、ジークフリードに恐れを知るやうになることが母の願であつたと語る、けれども成功しない、失望したミメはジークフリードに近くに住んで居る大蛇のことについて話す、ジークフリードはミメに其處へ連れて行つてくれと云ふ、併し第一に刀を鍛へねばならぬ事を知り、ミメが止めるにも拘らず自分で鍛へる、而して出来た刀を試さうとして鐵床を切ると、鐵床は二つに切れた、ミメは恐ろしさに震るへて居る、ジークフリードは歡喜充ち満ちて其劍を振りかざして歌ふ。

第二幕は森林の中の大蛇の洞穴である、アルベリツヒが

来る、彼は指環が取りかへしたくて萬事を忘れてかゝつて居る、ヴォータンも其處に現はれる、彼はアルベリツヒにミメ及びジークフリードの事などを語りアルベリツヒを諭す、アルベリツヒは蛇を醒させて、指環を返へすなら生命を助けてやらうと云ふ、大蛇は嘲笑する、ヴォータンはアルベリツヒを嘲つて居る、やがてジークフリードとミメが来る、アルベリツヒは隠れた、ミメは如何うかしてジークフリードに恐れと云ふものを抱かせようとするが駄目でジークフリードは只笑つて居るばかりである、彼はうるさいミメを追ひかへしてしまふ、彼は木の下に腰をかけて、美し